

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第10集

陶邑・大庭寺遺跡V

近畿自動車道松原・すさみ線建設に伴う発掘調査報告書

本文編

1996

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府文化財調査研究センター

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第10集

す え む ら お ば で ら
陶 邑 ・ 大 庭 寺 遺 跡 V

近畿自動車道松原・すさみ線建設に伴う発掘調査報告書

本文編

1996

大 阪 府 教 育 委 員 会
財団法人 大阪府文化財調査研究センター

序 文

大阪府堺市の東南部に広がる丘陵地帯は日本における須恵器生産の一大拠点としてよく知られている地域です。平成6年9月に開港した関西国際空港の主要アクセスである近畿自動車道路和歌山すさみ線がこの一角を縦断することになってから、本府といたしましても地域内の埋蔵文化財の取扱について関係各機関と協議を重ね万全の努力を払ってまいりました。

本路線に関わる埋蔵文化財の調査は現在の大阪府文化財調査研究センターに統合される前の大阪文化財センターと大阪府埋蔵文化財協会に委託して来ましたが、両法人から刊行された報告書だけでもすでに20冊を超えております。

ここに報告いたします大庭寺遺跡は、昭和62年に本格的な調査が始まって以来最古段階の須恵器が出土することで広く内外の関心を集めてきた遺跡です。初期須恵器工人のムラと窯跡に関する調査報告は、すでに4冊の本に記されており本書がその最後の巻となります。長期間にわたる調査をお願いした府文化財調査研究センターの関係者のご尽力をはじめ、多大なご協力をいただいた日本道路公団ならびに地元堺市の関係各位にふかく感謝いたします。

今後とも本府の文化財行政に対して、引続きご協力とご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成8年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 田中 宏

序 文

大庭寺遺跡のあります堺市の丘陵地帯は、古く「陶邑」と呼ばれ日本列島における一大窯業地帯でした。5世紀の初め頃韓国の伽耶地域から伝えられた窯業技術が須恵器として定着し、やがて陶器に変わってゆく日本の土器作りの歴史を大きく転換させることになった拠点地域の一つです。

ここに報告します大庭寺遺跡の発掘調査は、泉州沖に作られた関西国際空港への基幹道路の一つである高速道路建設にともなって行われたものです。昭和62年から6年間にわたる発掘調査を行いました。石津川沿いの沖積地から西の丘陵部、谷部に調査が進展するにしたがって最古段階の須恵器作りの工人のムラや窯址も発見され、広く内外の関心を集めることになりました。渡来工人が関係したと思われる日常生活用の土器も豊富に出土し、その調査成果はこれまで4冊の報告書で公表してきたところです。

本書はその最終巻として初期須恵器窯の一つと谷部出土の遺物群、最終年度まで未調査になっていた石津川沿い一角の住居址の調査成果を収録したものです。本遺跡は初期須恵器作りの遺跡として著名になりましたが、奈良時代から中世にかけても重要な遺構・遺物が発見されております。いま一度全体を縦覧していただくことで各時代の研究の一助になれば幸いです。

現地調査ならびに報告書の刊行にあたって、日本道路公団、堺市教育委員会、地元関係各位から多大のご協力とご支援があったことを深く感謝いたします。今後とも当センターの事業に変わらぬご理解をいただけますようお願い申し上げます。

平成8年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 坪井 清 足

例 言

1. 本書は、近畿自動車道松原・すさみ線建設に先立つ埋蔵文化財調査のうち、大阪府堺市小代・大庭寺地内に所在する大庭寺遺跡の発掘調査報告書の「V」である。
2. 調査は、日本道路公団の依頼を受け大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと財団法人大阪府文化財協会が実施し、報告書の作成は財団法人大阪府文化財調査研究センターに引き継いで実施した。
3. 本報告書は大庭寺遺跡の昭和62年度から平成4年度までの調査の中で、平成3年度と平成4年度に実施した大庭寺遺跡その6の一部とその7・8（調査区名第Ⅶ～第Ⅸ）に伴うものである。
4. 現地調査期間は大庭寺遺跡その6が平成3年4月～平成4年2月、大庭寺遺跡その7が平成4年4月～7月、大庭寺遺跡その8が平成4年7月～平成5年3月である。
5. 整理事業は平成5年4月から継続的に行ってきたが、平成7年4月より組織の統合に伴い財団法人大阪府文化財調査研究センターに引き継ぎ、平成8年3月に終了した。
6. 本書の執筆・編集は、調査部南部調査事務所整理係技師 岡戸哲紀が行った。
7. 整理では、土器の産地同定を奈良教育大学教授 三辻利一氏に依頼し、玉稿をいただいた。
8. 写真撮影は、遺構については調査担当者と小倉勝、遺物については調査部南部調査事務所泉北分室第2係主査 平井貞子が行った。
9. 出土遺物・写真は一括して当センター南部調査事務所に保管・管理している。広く利用されることを希望する。
10. 遺跡の平面図・遺構図は航空写真測量によって作成している。図面の縮尺はそれぞれ1/20、1/100の2種類である。保管・管理は当センター南部調査事務所で行っている。
11. 調査の実施に当たっては、日本道路公団大阪工事事務所、堺市教育委員会および地元各位の協力を得た。また、田辺昭三氏（京都造形芸術大学）、中村浩氏（大谷女子大学）、西村康氏（奈良国立文化財研究所）の各氏には現地指導を頂いた。
12. 整理については、数回の遺跡検討会を実施し、以下の方々にご教授を受けた。
安在皓（韓国東国大学校）、安春培（韓国新羅大学校）、趙榮濟（韓国慶尚大学校）、

金正完（韓国国立扶餘博物館）、金斗喆（韓国東国大学校）、河仁秀（韓国釜山広域市立博物館福泉分館）、洪漕植（韓国釜山広域市立博物館福泉分館）、李柱憲（韓国昌原文化財研究所）、朴升圭（韓国社団法人嶺南埋蔵文化財研究院）、申敬澈（韓国釜山大学校）、宋桂鉉（韓国釜山広域市立博物館）、孫明助（韓国国立慶州博物館）、朴天秀（韓国慶北大学校博物館）

井原絵（羽曳野市教育委員会）、植野浩三（奈良大学）、亀田修一（岡山理科大学）、定森秀夫（京都文化博物館）、田中清美（財団法人大阪市文化財協会）、土井和幸（堺市教育委員会）、藤原学（吹田市立博物館）、富加見泰彦（和歌山県教育委員会）、柳田康雄（福岡県教育委員会）

<順不同>

なお、お名前を記した方々の他にも、最終項に記するように多くの方々に、現地や整理事務所に度々足を運んで頂き、有形無形のご教授を頂いている。

凡 例

1. 本調査および本書では、第1章第2節でのべるような国土座標（第VI系）による地区割り設定がなされているが、平面図では方位が座標北を示し、図中にはXとY座標軸がm単位で標記される。
2. 標高は、東京湾標準潮位T.P.で統一している。
3. 遺構番号は各調査区で通し番号を付したが、調査区を越えて連続する遺構もあり、本書では第1章2節で示しているように新たな遺構番号を付し、これまで報告済みの遺構については前例に準じた。また、基本的に本文中に登場する遺構のみを図中には示している。遺構の性格を示す記号は当協会「発掘調査規程」に準じているが、窯跡については大阪府教育員会と協議し陶器窯跡群の窯番号に統一している。
4. 本書で使用した土壌色は、小山正忠、竹原秀雄編著『新版標準土色帖』を使用して命名した。
5. 遺構平面図についての縮尺については統一していない。
6. 遺物は、出土地・種類を問わず通し番号を付し、図と写真図版に共通する。遺物の縮尺については基本的に1/4で統一したが、一部1/6（大型甕）、2/3（窯道具など）で示したものもある。土器の断面図については基本的に須恵器を黒塗り、弥生土器・土師器を白塗りとし、軟質系土器については焼成の違いにより分けて表現した。

還元焰により硬質に仕上がったもの……黒塗り
還元焰でもやや軟質のもの……粗い網掛け
瓦質焼成のもの……濃い細かい網掛け
酸化焰でも硬質に仕上がったもの……薄い粗い網掛け
酸化焰により軟質に仕上がったものは……薄い細かい網掛け

また、この土器はこれまで、いわゆる韓式系軟質土器の範疇で考えられていたものであるが、焼成の状況の違いにより仕上がりに差異があり、ここでは朝鮮半島系の日常土器を軟質系土器として扱っている。
7. 焼き歪んだ土器は、基本的に復元実測で行っている。
8. 本書の中で、研究の現状から勘案して不適当な表現がみられた場合は、すべて報告者に帰すが、他意のあるものではない点御容赦願いたい。

本文目次

序 文	
例 言	
凡 例	
第 I 章 はじめに	1
第 1 節 大庭寺遺跡の調査経過	1
第 2 節 大庭寺遺跡の概要	3
第 1 項 遺跡の立地	
第 2 項 調査の方法	
第 3 項 遺跡の概要	
第 II 章 第 VII 区の調査成果	24
第 1 節 調査概要と基本層序	24
第 2 節 検出された遺構	25
第 3 節 小 結	25
第 III 章 第 VIII・IX 区の調査成果	29
第 1 節 調査概要	29
第 2 節 谷部 1 (1-O L) の調査	30
第 1 項 谷の概要	
第 2 項 谷の堆積過程と出土遺物	
第 3 節 小埋折谷 (393-O L) の調査	44
第 1 項 谷の概要	
第 2 項 谷の堆積過程	
第 3 項 出土遺物	
第 4 節 小 結	137

第Ⅳ章 第Ⅹ区の調査成果	143
第1節 調査概要	143
第1項 概要	
第2項 基本層序	
第2節 検出された遺構と遺物	148
第1項 古墳時代	
第2項 奈良時代	
第3項 鎌倉時代	
第3節 河川（56-OR）の調査	163
第1項 概要	
第2項 出土遺物	
第4節 小結	214
第1項 古墳時代中期の集落	
第2項 旧河川（56-OR）	
第Ⅴ章 第Ⅺ区の調査成果	227
第1節 調査概要	227
第2節 検出された遺構と遺物	227
第3節 小結	230
第Ⅵ章 第Ⅻ・Ⅼ・Ⅽ区の調査成果	232
第1節 谷部2（2-OL）の概要	232
第1項 概要	
第2項 地層の堆積状況	
第3項 検出された遺構	
第2節 TG231号窯の調査	249
第1項 概要	
第2項 窯の立地	
第3項 灰原の状況	
第4項 出土遺物	

第4節 小結	302
第1項 弥生時代～古墳時代前期の集落	
第2項 初期須恵器窯（古墳時代中期）	
第Ⅶ章 分析	307
第Ⅷ章 結語	318

挿図目次

第1図	大阪府位置図	1
第2図	大庭寺遺跡位置図(1988年)	4
第3図	大庭寺遺跡周辺の谷地形	5
第4図	調査区の地形	6
第5図	周辺の遺跡分布図(大阪府文化財分布図1991年3月より作成)	8
第6図	主要な初期須恵器窯と周辺集落	9
第7図	調査区割全体図	11
第8図	調査地区割模式図	13
第9図	古墳時代の遺構と地形断面図	15~16
第10図	古墳時代の大庭寺遺跡	19
第11図	奈良時代の大庭寺遺跡	21
第12図	平安時代の大庭寺遺跡	22
第13図	鎌倉時代の大庭寺遺跡	23
第14図	第Ⅶ調査区の基本層序	24
第15図	第Ⅶ調査区弥生時代の遺構	26
第16図	第Ⅶ調査区近世の耕作跡	27
第17図	平地部で検出された弥生時代の遺構	28
第18図	谷部1(1-O-L)土層図	31~32
第19図	谷部1(1-O-L)自然流路801-O-S出土遺物	34
第20図	谷部1における初期須恵器の出土分布	36
第21図	谷部1(1-O-L)中央部・丘陵2側斜面部出土遺物	37
第22図	谷部1(1-O-L)丘陵2側斜面部出土遺物	38
第23図	谷部1(1-O-L)丘陵2側斜面部出土遺物	39
第24図	谷部1(1-O-L)丘陵1側斜面部第Ⅳ層出土遺物	40
第25図	谷部1(1-O-L)丘陵1側斜面部第Ⅳ層出土遺物	41
第26図	谷部1(1-O-L)丘陵1側斜面部第Ⅵ層出土遺物	42
第27図	谷部1(1-O-L)丘陵1側斜面部第Ⅶ層出土遺物	43

第28図	窯・谷・集落の位置関係	45
第29図	小開折谷 (393-OL) 土層図	46
第30図	谷部1 (393-OL) 第I~III層出土遺物	50
第31図	谷部1 (393-OL) 第IV層出土遺物1	52
第32図	谷部1 (393-OL) 第IV層出土遺物2	53
第33図	谷部1 (393-OL) 第IV層出土遺物3	54
第34図	谷部1 (393-OL) 第V層出土遺物1	57
第35図	谷部1 (393-OL) 第V層出土遺物2	59
第36図	谷部1 (393-OL) 第V層出土遺物3	60
第37図	谷部1 (393-OL) 第V層出土遺物4	61
第38図	谷部1 (393-OL) 第VI層上面出土土器群1・2	63
第39図	谷部1 (393-OL) 第VI層出土遺物1	67
第40図	谷部1 (393-OL) 第VI層出土遺物2	68
第41図	谷部1 (393-OL) 第VI層出土遺物3	70
第42図	谷部1 (393-OL) 第VI層出土遺物4	71
第43図	谷部1 (393-OL) 第VI層出土遺物5	73
第44図	谷部1 (393-OL) 第VI層出土遺物6	75
第45図	谷部1 (393-OL) 第VI層出土遺物7	76
第46図	谷部1 (393-OL) 第VI層出土遺物8	77
第47図	谷部1 (393-OL) 第VI層出土遺物9	78
第48図	谷部1 (393-OL) 第VI層出土遺物10	79
第49図	谷部1 (393-OL) 第VI層出土遺物11	81
第50図	谷部1 (393-OL) 第VI層出土遺物12	82
第51図	谷部1 (393-OL) 第VI層出土遺物13	83
第52図	谷部1 (393-OL) 第VI層出土遺物14	85
第53図	谷部1 (393-OL) 第VI層出土遺物15	86
第54図	線刻絵西拓影	87
第55図	谷部1 (393-OL) 第VI層出土遺物16	88
第56図	谷部1 (393-OL) 第VI層出土遺物17	89
第57図	谷部1 (393-OL) 第VI層出土遺物18	90

第58図	谷部1 (393-O L) 第VI層出土遺物19	91
第59図	谷部1 (393-O L) 第VI層出土遺物20	92
第60図	谷部1 (393-O L) 第VII層出土遺物1	95
第61図	谷部1 (393-O L) 第VII層出土遺物2	97
第62図	谷部1 (393-O L) 第VII層出土遺物3	99
第63図	谷部1 (393-O L) 第VII層出土遺物4	101
第64図	谷部1 (393-O L) 第VII層出土遺物5	102
第65図	谷部1 (393-O L) 第VII層出土遺物6	103
第66図	谷部1 (393-O L) 第VII層出土遺物7	105
第67図	谷部1 (393-O L) 第VII層出土遺物8	106
第68図	谷部1 (393-O L) 第VII層出土遺物9	107
第69図	谷部1 (393-O L) 第VII層出土遺物10	108
第70図	谷部1 (393-O L) 第VII層出土遺物11	109
第71図	谷部1 (393-O L) 第VII層出土遺物12	110
第72図	谷部1 (393-O L) 第VII層出土遺物13	112
第73図	谷部1 (393-O L) 第VII層出土遺物14	113
第74図	谷部1 (393-O L) 第VII層出土遺物15	114
第75図	谷部1 (393-O L) 第VII層出土遺物16	115
第76図	谷部1 (393-O L) 第VII層出土遺物17	116
第77図	谷部1 (393-O L) 第VII層出土遺物18	117
第78図	393-O L第VII層(下層)遺物出土状況図	119
第79図	393-O L第VII層(下層)出土遺物の接合関係	121~122
第80図	谷部1 (393-O L) 第VII層下層出土遺物1	123
第81図	谷部1 (393-O L) 第VII層下層出土遺物2	124
第82図	谷部1 (393-O L) 第VII層下層出土遺物3	125
第83図	谷部1 (393-O L) 第VII層下層出土遺物4	127
第84図	谷部1 (393-O L) 第VII層下層出土遺物5	128
第85図	谷部1 (393-O L) 第VII層下層出土遺物6	129
第86図	谷部1 (393-O L) 第VII層下層出土遺物7	130
第87図	谷部1 (393-O L) 第VII層下層出土遺物8	131

第88図	谷部1 (393-OL) 第Ⅷ層下層出土遺物9	133
第89図	谷部1 (393-OL) 出土アテ具・異形須恵器	134
第90図	谷部1 (393-OL) 出土石製品	135
第91図	谷部1 (393-OL) 出土銅印	136
第92図	谷部1 (393-OL) 第Ⅶ・Ⅷ層における遺物分布〔古墳時代中期のみ〕	138
第93図	谷部1 (393-OL) における古墳時代中期の遺物比率	139
第94図	第Ⅹ調査区遺構図	144
第95図	第Ⅹ調査区の基本層序	145
第96図	第Ⅲ・Ⅴ層出土遺物	146
第97図	第Ⅹ調査区周辺の古墳時代遺構	147
第98図	竪穴住居(44-OD) 平・断面図	149
第99図	竪穴住居(44-OD) 拡張の変遷	150
第100図	竪穴住居(44-OD) 出土遺物	151
第101図	溝(601-OS) 平・断面図	152
第102図	溝(601-OS) 出土遺物	153
第103図	井戸(42-OW) 遺物出土状況図	154
第104図	井戸(42-OW) 出土遺物1	155
第105図	井戸(42-OW) 出土遺物2	156
第106図	井戸(42-OW) 出土遺物3	157
第107図	土墳墓(68-OU) 平・断面図	158
第108図	土墳墓(68-OU) 出土遺物	159
第109図	溝(484・560-OS) 出土遺物	160
第110図	奈良・鎌倉時代の遺構	161
第111図	溝(1010・1011-OS) 出土遺物	162
第112図	河川(56-OR) の堆積状況	163
第113図	河川(56-OR) 内遺物出土位置	165
第114図	河川(56-OR) 岸部A群出土遺物1	167
第115図	河川(56-OR) 岸部A群出土遺物2	168
第116図	河川(56-OR) 岸部A群出土遺物3	170
第117図	河川(56-OR) 岸部A群出土遺物4	171

第118図	河川 (56-OR) 岸部A群出土遺物 5	172
第119図	河川 (56-OR) 岸部A群出土遺物 6	174
第120図	河川 (56-OR) 岸部A群出土遺物 7	175
第121図	河川 (56-OR) 岸部A群出土遺物 8	177
第122図	河川 (56-OR) 岸部A群出土遺物 9	178
第123図	河川 (56-OR) 岸部A群出土遺物10	179
第124図	河川 (56-OR) 岸部A群出土遺物11	181
第125図	河川 (56-OR) 岸部A群出土遺物12	182
第126図	河川 (56-OR) 岸部A群出土遺物13	183
第127図	河川 (56-OR) 岸部A群出土遺物14	184
第128図	河川 (56-OR) 岸部A群出土遺物15	185
第129図	河川 (56-OR) 岸部A群出土遺物16	186
第130図	河川 (56-OR) 岸部A群出土遺物17	187
第131図	河川 (56-OR) 岸部A群出土遺物18	188
第132図	河川 (56-OR) 岸部A群出土遺物19	190
第133図	河川 (56-OR) 岸部B群出土遺物 1	192
第134図	河川 (56-OR) 岸部B群出土遺物 2	193
第135図	河川 (56-OR) 岸部B群出土遺物 3	194
第136図	河川 (56-OR) 岸部B群出土遺物 4	195
第137図	河川 (56-OR) 岸部C群出土遺物 1	199
第138図	河川 (56-OR) 岸部C群出土遺物 2	200
第139図	河川 (56-OR) 岸部C群出土遺物 3	201
第140図	河川 (56-OR) 岸部C群出土遺物 4	202
第141図	河川 (56-OR) 岸部C群出土遺物 5	203
第142図	河川 (56-OR) 岸部C群出土遺物 6	204
第143図	河川 (56-OR) 岸部C群出土遺物 7	205
第144図	河川 (56-OR) 岸部C群出土遺物 8	206
第145図	河川 (56-OR) 岸部上層出土遺物 1	207
第146図	河川 (56-OR) 岸部上層出土遺物 2	208
第147図	河川 (56-OR) 堆積層出土遺物 1 (遺物群1)	210

第148図	河川 (56-OR) 堆積層出土遺物2 (遺物群2・3)	211
第149図	河川 (56-OR) 堆積層出土遺物3 (初期須恵器)	212
第150図	河川 (56-OR) 堆積層出土遺物4 (紡錘車・フイゴ・石製品)	213
第151図	旧河川 (56-OR) 岸部と谷部1 (393-OL) 出土蓋杯の法量比較	217
第152図	旧河川 (56-OR) における遺物の出土分布	220
第153図	旧河川 (56-OR) 1987年度調査地B・C地区の出土遺物1	221
第154図	旧河川 (56-OR) 1987年度調査地B・C地区の出土遺物2	222
第155図	旧河川 (56-OR) 1987年度調査地B・C地区の出土遺物3	223
第156図	旧河川 (56-OR) 1987年度調査地B・C地区の出土遺物4	224
第157図	旧河川 (56-OR) 1987年度調査地B・C地区の出土遺物5	225
第158図	第X・XI調査区周辺の奈良時代遺構	228
第159図	第XI調査区遺構図	229
第160図	溝 (1120-OS) 断面図	230
第161図	溝 (1120-OS) 出土遺物	231
第162図	谷部2 (2-0L) 周辺の全体図 (第XII~XIV調査区)	233~234
第163図	谷部2 (2-0L) 土層断面図1	235~236
第164図	谷部2 (2-0L) 土層断面図2	238
第165図	谷部2 (2-0L) 第I~IV層出土遺物	239
第166図	谷部2 (2-0L) 第V層出土遺物	240
第167図	谷部2 (2-0L) 第VI層出土遺物	241
第168図	谷部2 (2-0L) 第VII層出土遺物1	242
第169図	谷部2 (2-0L) 第VII層出土遺物2	243
第170図	溝 (1001-OS)・自然流路 (1301-OS) 出土遺物	245
第171図	自然流路 (1301-OS) 内土器群3・4出土状況図	246
第172図	自然流路 (1301-OS) 内土器群1~4	247
第173図	土坑 (1304・1305・1319・1324・1325-OO) 出土遺物	248
第174図	T G 231・232号窯周辺の地形	250
第175図	T G 231号窯の土層断面図	253
第176図	T G 231号窯出土須恵器1 (把手付碗・蓋・高杯)	257
第177図	T G 231号窯出土須恵器2 (高杯・脚台付鉢)	260

第178图	T G231号窯出土須恵器 3 (小型壺)	261
第179图	T G231号窯出土須恵器 4 (器台)	263
第180图	T G231号窯出土須恵器 5 (器台)	264
第181图	T G231号窯出土須恵器 6 (壺)	266
第182图	T G231号窯出土須恵器 7 (壺)	267
第183图	T G231号窯出土須恵器 8 (壺)	268
第184图	T G231号窯出土須恵器 9 (壺)	269
第185图	T G231号窯出土須恵器10 (壺)	270
第186图	T G231号窯出土須恵器11 (壺)	271
第187图	T G231号窯出土須恵器12 (壺)	272
第188图	T G231号窯出土須恵器13 (壺)	273
第189图	T G231号窯出土須恵器14 (壺)	274
第190图	T G231号窯出土須恵器15 (壺)	275
第191图	T G231号窯出土須恵器16 (壺)	276
第192图	大型甕口縁分類図	278
第193图	T G231号窯出土須恵器17 (大型甕)	279
第194图	T G231号窯出土須恵器18 (大型甕)	280
第195图	T G231号窯出土須恵器19 (大型甕)	281
第196图	T G231号窯出土須恵器20 (大型甕)	282
第197图	T G231号窯出土須恵器21 (大型甕)	283
第198图	T G231号窯出土須恵器22 (大型甕)	284
第199图	T G231号窯出土須恵器23 (大型甕)	285
第200图	T G231号窯出土須恵器24 (大型甕)	286
第201图	T G231号窯出土須恵器25 (大型甕)	287
第202图	T G231号窯出土須恵器26 (大型甕)	288
第203图	T G231号窯出土須恵器27 (大型甕)	289
第204图	T G231号窯出土須恵器28 (大型甕)	290
第205图	T G231号窯出土須恵器29 (大型甕)	291
第206图	T G231号窯出土須恵器30 (大型甕底部)	292
第207图	T G231号窯出土軟質系土器 1	295

第208図	T G 231号窯出土軟質系土器 2	296
第209図	T G 231号窯出土軟質系土器 3	297
第210図	T G 231号窯出土アテ具	298
第211図	T G 231号窯下層出土遺物 1	299
第212図	T G 231号窯下層出土遺物 2	300
第213図	T G 231号窯下層出土遺物 3	301

分析挿図目次

図 1	T G - 232号窯出土須恵器（甕類）の R b - S r 分布図	307
図 2	T G - 232号窯出土須恵器（小型器種）の R b - S r 分布図	308
図 3	T G - 232号窯出土須恵器（小型器種）の K - C a 分布図	308
図 4	T G - 232号窯甕類と小型器種の相互識別 (K, C a, R b, S r 因子使用)	309
図 5	T G - 232号窯出土甕類と小型器種の F e 因子の比較	310
図 6	T G - 232号窯出土甕類と小型器種の N a 因子の比較	310
図 7	大阪陶邑群と伽耶群の相互識別 (K, C a, R b, S r 因子使用)	312
図 8	T G - 232号窯出土硬質土器（小型器種）の胎土	312
図 9	T G - 232号窯出土硬質土器（甕類）の胎土	313

付 図

- 付図 1 大庭寺遺跡全体図 1
 付図 2 大庭寺遺跡全体図 2

第I章 はじめに

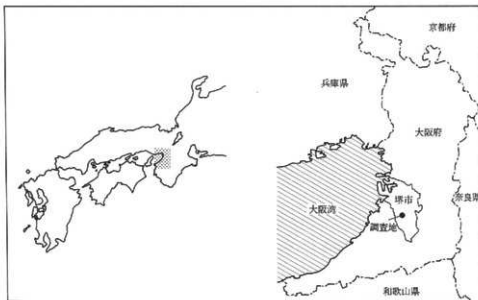
第1節 大庭寺遺跡の調査経過

大庭寺遺跡は大阪府堺市大庭寺・小代に所在する。

調査は、1994年9月に開港した関西国際空港の主要アクセスのひとつである近畿自動車道松原・すさみ線建設に伴い、日本道路公団大阪建設局の依頼により、大阪府教育委員会の指導を受けて行った。

発掘調査は1987年に行われた試掘調査に始まり、以後、用地取得の関係もあり1993年3月まで継続的に行われた。足掛け7年の長きにわたる大規模調査であったが、調査によって得られた成果は質・量ともに他遺跡を圧倒するものであった。

特に、わが国最古とされる須恵器窯や須恵器生産集団の住居、墓の発見は全国的に注目された。これらの遺構の有機的な関係が明確になったことにより「最古段階須恵器づくりのムラ」の構造が把握され、さらに出土した膨大な量の初期須恵器や日常土器も前例の少ない良好な資料となった。わが国における須恵器生産の開始に係わる研究の飛躍的進展に



第1図 大阪府位置図

大きな役割を果たしたといっても過言ではない。

その他、古墳時代中期以降の集落展開が把握されたことも大きな成果として注目されている。古墳時代後期や奈良時代では、建物配置が明らかとなり集落構造が把握され、「陶邑」の発展を考える上で重要な資料となっている。また、鎌倉時代では幅約2m、深さ約1～1.5mの溝で囲まれた屋敷地が検出され、和泉地域における中世館の代表資料となり、研究の進展に大きく貢献している。

これら多岐にわたる成果については、その都度現地説明会を開催することにより一般公開してきた。その回数は計5回に及び、わが国最古の須恵器窯の発見に際しては、新聞・テレビ等で大きく報道されたこともあり、悪天候にもかかわらず全国から数多くの見学者が大庭寺遺跡を訪れた。

その他にも大庭寺遺跡の調査成果については、毎年定期的に行ってきた調査速報展「泉州の遺跡展」で遺物の公開展示を行ってきた。このうち1993年大阪府立弥生文化博物館で開催した「泉州の遺跡展」では、特別展示「須恵器のはじまりを考える」を企画し、大庭寺遺跡を通してわが国における須恵器生産開始の問題を取り上げている。

遺物整理は、年度毎の調査区単位で随時行い、これまで「陶邑・大庭寺遺跡」として4冊の報告書を刊行している。簡単にその内容を記すと、第Ⅰ冊は弥生時代から古墳時代の旧河川と奈良・鎌倉時代の集落、第Ⅱ冊は古墳時代から平安時代の集落、第Ⅲ冊は古墳時代から平安時代集落と初期須恵器が多量に出土した小開折谷、第Ⅳ冊は須恵器窯と初期須恵器の土器溜りが報告の中心となっている。

なお、上記の報告は前述の通り年度毎で随時行ったため、報告時点では不明確で誤認していた事実関係もある。これらについては、調査の進展に伴い新事実が明らかになった時点の報告で訂正を行い、より正確な大庭寺遺跡の解明に心がけてきた。

- 註1 『陶邑・大庭寺遺跡』朝大阪府文化財協会発掘調査報告書第41輯 1989年
- 2 『陶邑・大庭寺遺跡Ⅱ』朝大阪府文化財協会発掘調査報告書第50輯 1990年
- 3 『陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ』朝大阪府文化財協会発掘調査報告書第75輯 1993年
- 4 『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』朝大阪府文化財協会発掘調査報告書第90輯 1995年
- 5 『須恵器のはじまりを考える』大阪府立弥生文化博物館平成5年夏期企画展
図録 1993年

第2節 大庭寺遺跡の調査概要

第1項 遺跡の立地

1. 遺跡の位置（第1・2図）

大庭寺遺跡は大阪府堺市大庭寺・小代（おばでら・こだい）付近一帯に所在する。堺市は、大阪府南部に細長く延びる泉州地域の北部域にあたり、市域の西側は大阪湾に面し、大和川によって限られる北側は大阪市、南側は高石市・和泉市、東側は松原市・大阪狭山市などと接している。

市域のおおまかな地形を概観すると、海岸部に近い北西部に広がる平野部と南東部に広がる丘陵地に分けられるが、大庭寺遺跡は泉北丘陵と呼称される丘陵地に立地している。

この泉北丘陵は1960年代からニュータウン開発が活発に進められた地域で、宅地造成や道路・鉄道建設によって、当時の地形は大きく改変されている。このため、現状ではおおまかにしか開発以前の景観をうかがい知ることはできない。ただ、大庭寺遺跡周辺部はニュータウン開発の縁辺部であったことが幸いし、大規模開発による地形改変を免れ、高速道路建設以前は比較的当時の景観が良好に残存していた。

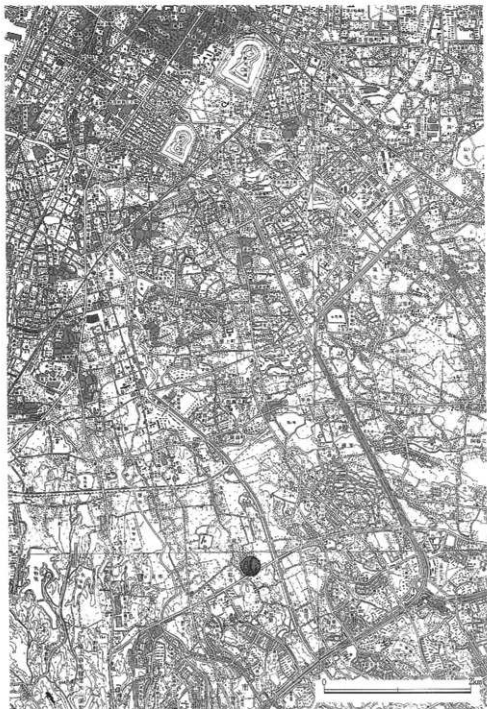
2. 遺跡の立地と調査地の地形（第3～6・9図、図版1・2）

西側を弓状に細長く延びる泉州地域は、西側を大阪湾に面し、東側には和歌山県との県境となる和泉山脈が南北に連なっている。この和泉山脈を背後にして、前面には丘陵部、段丘部、平野部が形成されるが、北部域ほど平野部の発達が顕著である。また、平野部では海岸線に沿って砂州が発達し段丘との間には後背湿地が形成される。肥沃な生産地としての役割を果たしてきたことがうかがえよう。

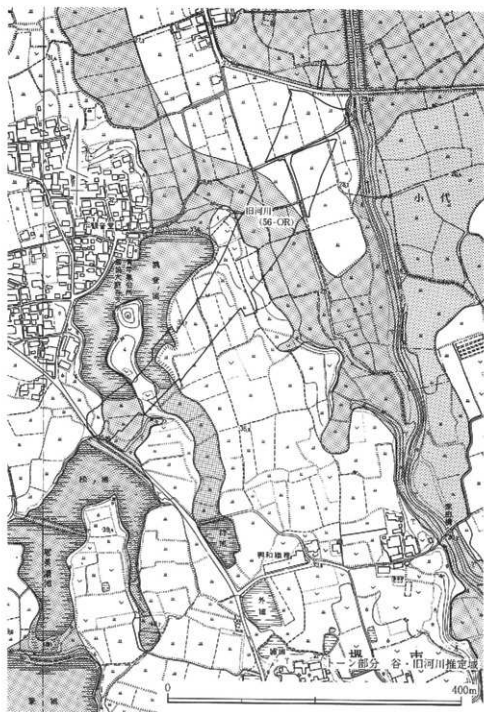
一方、和泉山脈から派生する丘陵は、数多くの中小河川によって開析され、丘陵や段丘部の周辺には狭小ながら沖積地が形成されている。

堺市の南東部に広がる泉北丘陵も、和泉山脈から北西方向に向かって派生し、丘陵先端部付近は緩やかな傾斜をもつ段丘地形となり平野部へとつながる。丘陵や段丘間には、蛇行しながら走る石津川やその支流である和田川、陶器川などによって開析され、中流域では河川周辺に狭小ながら沖積地が形成されている。

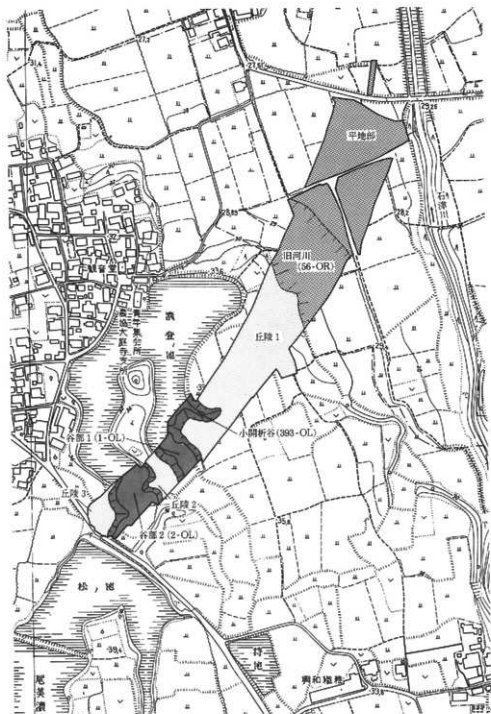
大庭寺遺跡は、泉北丘陵の中でも梅（とが）丘陵と呼称される丘陵から延びる中位段丘面から石津川によって形成された沖積段丘上に展開する。遺跡内における中位段丘面の標



第2圖 大庭寺遺跡位置圖(1988年)



第3図 大庭寺遺跡周辺の谷地形



第4図 調査区の地形

高は30～34mを測り、遺跡を二分する形で開析谷が奥深くまで入り込む。この開析谷は石津川に近い開口部付近では幅約100mを測る1本の谷であるが、谷奥に入り込むにつれ枝別れし各所に小規模な埋折谷も観察される。沖積段丘面は大庭寺遺跡周辺では左岸の発達が目著しにみられ、遺跡内での標高は高いところで約28mを測り、河川に向かって緩やかに傾斜している。

大庭寺遺跡の遺跡範囲は大阪府文化財分布図（第5図参照）によると東西1.5km、南北2kmとされている。本調査は道路建設予定地を対象としたため、遺跡の中心を総延長約550mにはば北東方向に貫く形で行うことができた。そのため、調査地は沖積段丘面やその下層、中位段丘面、開析谷など多岐に及び、地形の利用方法や集落と地形の関係など得られた成果も大であった。

当報告書では、調査地の地形が上記のように多岐にわたり複雑なため、便宜上第4・9図に示した略称により地形の表現を行っている。

なお、考古学的環境については、既刊の報告書で詳説されているため、遺跡周辺の遺跡分布図と陶邑における主要な初期須恵器窯と関連する周辺集落の分布図を示すにとどめている。

第2項 調査の方法

1. 調査担当者

前述した通り、大庭寺遺跡の発掘調査は足掛け7か年の年月を費やして終了した。そのため多くの職員が遺跡の発掘に携わることとなった。以下、各調査区の担当者と報告書の担当者を明記しておく。

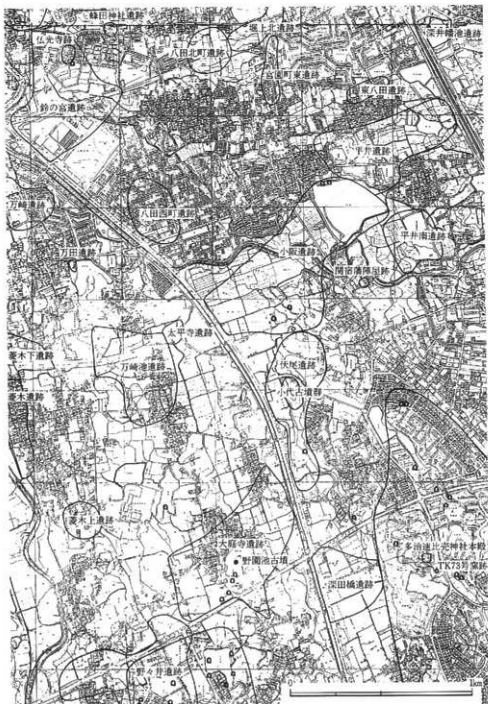
発掘調査

1986年度

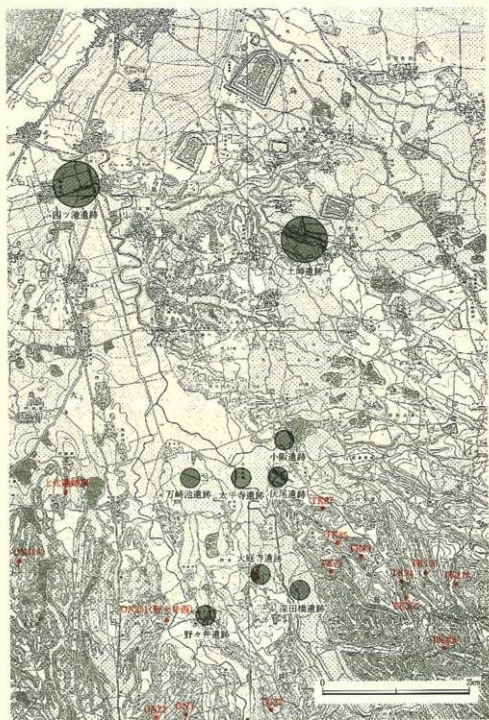
試掘調査—有井広幸（現財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）・有井宏子
（現大阪府教育委員会）

1987年度

調査地A—森村健一（現堺市教育委員会）・有井宏子
調査地B—富加見泰彦（現和歌山県教育委員会）・田中一廣（現財団法人大阪府文化財調査研究センター）



第5図 周辺の遺跡分布図 (大阪府文化財分布図1991年3月より作成)



第6図 主要な初期須恵器窯と周辺集落

調査地C－福宜田佳男（現大阪府教育委員会）・有井広幸

1988年度

I区A, II区, III区A・B, IV区A～C, V区－富加見泰彦・山上雅弘（現兵庫県教育委員会）・有井広幸

1989年度

I区B, IV区D－富加見泰彦・積山洋（現財団法人大阪市文化財協会）

1990年度

I区C・D・E－富加見泰彦・土井和幸（現堺市教育委員会）

VI区A－奥和之（現大阪府教育委員会）

1991年度

VI区B－奥和之

VII～IX区－岡戸哲紀（現財団法人大阪府文化財調査研究センター）

1992年度

X～XII区－岡戸哲紀

調査報告書

『陶邑・大庭寺遺跡Ⅰ』－森村健一・富加見泰彦・福宜田佳男・田中一廣・有井広幸・有井宏子

『陶邑・大庭寺遺跡Ⅱ』－富加見泰彦・積山洋・山上雅弘・有井広幸

『陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ』－富加見泰彦・土井和幸

『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』－藤田憲司（現財団法人大阪府文化財調査研究センター）・奥和之・岡戸哲紀

『陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ』－岡戸哲紀

2. 調査区の設定（第7図）

大庭寺遺跡の発掘調査では、水路、里道、溜池などの地形的制約や用地取得に係わる制約が大きく、調査年度を基本にして調査区を設定している。そのため、第7図に示した通り煩雑な状況を示す結果となった。また、調査報告書も調査年度を基本としてまとめ、調査時点で設定した調査区名を踏襲して随時刊行している。以下、調査区と報告書の関係を明記しておく。

財団法人大阪府文化財協会刊行の報告書

第41輯『陶邑・大庭寺遺跡』—調査地A・B・C

第50輯『陶邑・大庭寺遺跡II』—I区A・B, II区, III区A・B, IV区A~D, V区

第75輯『陶邑・大庭寺遺跡III』—I区C・D・E

第90輯『陶邑・大庭寺遺跡IV』—VI区A・B

財団法人大阪府文化財調査研究センター刊行の報告書

『陶邑・大庭寺遺跡V』—VII~VIII区

3. 調査区内の地区割り (第8図)

発掘調査・整理では標準化を計るため一定基準を定め、調査規程を作成している。調査区内の地区割りもこの規程により、以下の通りに行った(第8図参照)。

遺跡の位置は新平面直角座標の第VI座標系を使用して表示する。

遺跡内の地区割り(区画割り)は、まず1/2500の地形図を12等分して500m×500mの区画をつくり、A~Lまでの記号で示す。次に500m×500mの区画を25等分して100m×100mの区画をつくり、01から25までの数値で示す。さらに100m×100mの区画を625等分して4m×4mの区画をつくる。この4m×4mの区画は列・行の順で2文字のアルファベットで示す。この区画割りにより第8図の斜線部は大E-5-5-K22T1となる。

4. 遺物の取り上げ

遺物の取り上げは、前述の地区割りにより、4×4mの単位を基本に行っている。

5. 遺構番号

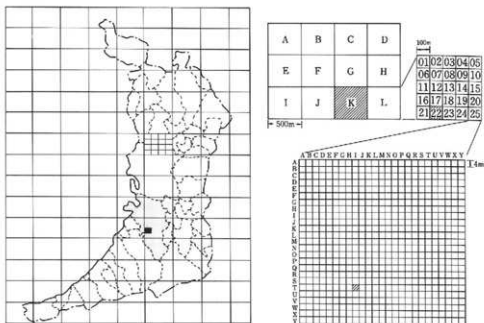
遺構番号は各調査区毎に1番から連続して与えている。しかし、溝や河川など複数調査区にわたって検出される遺構もある。これらの遺構についても調査時点では、調査区毎の連続遺構番号を与えている。しかし、本報告では遺構番号の煩雑化を避けるため、既刊の報告書で報告済みの遺構については既報告書に従い、未報告の遺構については新たな遺構番号を付加する。なお、本報告で変更となる遺構番号は以下の通りである。

Ⅶ区1-OS→14-OS

Ⅶ区谷部→谷部1(1-O L)

Ⅷ区谷部→谷部1(393-O L)

X区41-OS→601-OS



*斜線部は大E-5-5-K22T Iである。

第8図 調査地区割模式図

X区40-OR→56-OR

X区42-OS→484・560-OS

X区10・11-OS→1010・1011-OS

XI区20-OS→1120-OS

Ⅷ・Ⅷ区谷部→谷部2

Ⅵ区B・14区27-OK→TG231号窟

6. 遺構の種類

遺構の性格を示す記号は以下の通り定めている。

OR (河川) OB (建物) OD (竪穴住居) OK (竈) OO (土坑)

OP (ピット) OS (溝) OL (池・谷) OU (墓) OX (不明遺構)

7. 遺跡の図面

遺跡の図面は航空測量を実施し、調査地全域で1/20・1/100の平面図を作成している。また、調査中には遺跡細部の情報を得るため、遺物の出土状況・土層断面などの図面を適宜作成している。

第3項 遺跡の概要

大庭寺遺跡では縄紋時代から近世に至る各時期の遺構が確認されている。ここでは、検出された遺構を中心にして、各時期の集落の様相を概観し大庭寺遺跡の集落の展開について簡単に記しておく。

1. 縄紋時代

明確な遺構は検出されていないが、旧河川（56-OR）の肩部付近の浅い落込みや河川堆積層から、晩期の土器やサヌカイト製の不定形石器などが出土している。

2. 弥生時代

弥生時代の明確な遺構がみられるのは中期以降である。

中期の遺構は平地部で溝が数条確認されているが、奈良時代から鎌倉時代の集落跡の保存区域と重なっているため部分的な確認に留まり、遺構の性格など不明な部分が多い。

一方、平地部より奥に入り込んだ丘陵部（丘陵2）では遺構は検出されなかったが、斜面地で良好な遺物包含層を確認した。遺構は残されていないが、この丘陵上に小規模ながら集落が営まれていたことが確実視される。

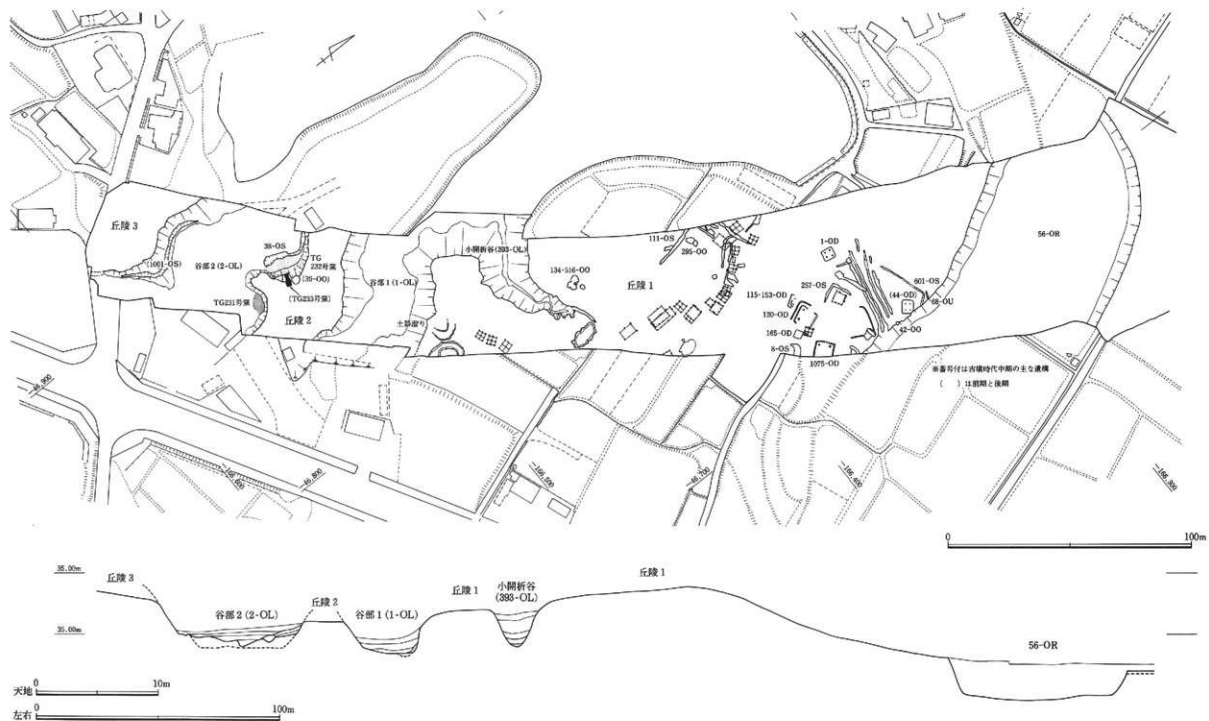
後期では、沖積化した平地部で竪穴住居2棟が検出されている。これらの住居のすぐ南西側には旧河川（56-OR）が流れており、住居が自然堤防状の微高地上に点在して営まれていたことがうかがえる。さらに、後期の遺物は谷部2（2-OL）でも出土が確認されている。平地部より奥に入った丘陵上にも小規模ながら集落が展開していたことがうかがえよう。

3. 古墳時代（第9・10図）

古墳時代の遺構は、前期から後期にわたってみられるが、特に須恵器生産が開始されて以降の遺構・遺物には眼を見張るものがあり質・量共に他の時期を圧倒している。ここでは、前期・中期・後期にわけて古墳時代の遺跡を概観する。

前期

明確な遺構は旧河川（56-OR）の右岸の平地部で井戸、左岸で竪穴住居が検出されたのみである。さらに、遺構の時期には、井戸が布留期の古段階、竪穴住居は井戸よりも後出する段階と時期差も認められた。



第9図 古墳時代の遺構と地形断面図

当該期の集落は古墳時代前期に至っても飛躍的な発展はみられず、弥生時代以来の伝統を引く小規模な集落であったことがうかがえよう。

中期

中期になると、大庭寺遺跡は最古段階（TG232号型式）須恵器の生産集落として飛躍的な発展を遂げ、前代とは集落様相が一変する。

生産集落を概観すると、集落域の一番奥まった狭く細長い丘陵2に窯（TG231・232号窯）が築かれ、集落の前面にあたる丘陵1の緩やかな斜面地には溝で区画された居住地や土壌墓が築かれていた。さらに窯に近い谷（393-OL）は須恵器の出土状況から製品の選別場としての役割が推測され、集落に接する旧河川（56-0R）は当時の流通を考えた場合の交通路としての役割が推測された。大庭寺遺跡では、アトリエ的な工房跡は発見されていないが、現成果でも生産（製作・選別）・流通・生活の場は推定され、計画的な集落開発がうかがえた。

一方で、出土遺物に眼を向けると、朝鮮半島の陶質土器の系譜を色濃く反映させた須恵器や日常土器に軟質土器が数多くみられることから、「大庭寺ムラ」は渡来系の人々を中心に集団が構成されていたことも明らかとなった。さらに、明確な遺構は検出されていないが、最古型式の須恵器に後出する製品を伴う土器溜りが谷部1（1-OL）で確認され、調査区外での当該期の遺構（住居や窯）の存在も確実視されている。

古墳時代中期、須恵器生産の開始に伴い大庭寺遺跡はその性格を大きく変容するが、その変容の内容・発展規模からは、前代からの伝統的な発展とは考え難い状況にある。むしろ、突如、この地に「須恵器づくりのムラ」として出現・成立し、その後も「陶邑」の発展に重要な役割を果たしたのではないかと考えられる。

後期

後期の集落も中期同様須恵器生産に関連したと考えられる。検出された遺構には掘立柱建物、土坑、溝、古墳、窯跡などがあり、これらの遺構群はおおよそ6世紀の前半、6世紀中頃、6世紀末～7世紀初頭の3時期に分けられる。

建物は6世紀前半代のものが中心で、中期の居住域とは異なり比較的広い平坦面を有する丘陵1の上部付近に集中してみられた。さらに斜面地には排水の目的か溝が河川に向かって数条掘削され、この周辺が当期集落の中心地とされている。

古墳は丘陵1の南側で検出されたが、周溝のみの残存で疑問視する声もある。時期は6世紀の末頃に比定されている。窯跡も古墳とほぼ同時期と考えられ、丘陵2で検出された

初期須恵器窯T G232号窯と重複していた。

その他、後期では旧河川（56-OR）の調査で大きな成果が上げられている。この旧河川は弥生時代から古墳時代まで、河道を変更させるような大きな流れの変化はなかったが、古墳時代後期を境にして一変する。一度に堆積した砂礫が顕著となり、洪水層による沖積化が始まる。河岸に6世紀前半代の須恵器がまとめて廃棄されていることから当期までは河川として機能していたが、中頃～末になると遺物の出土状況から判断して急速に沖積化が進行したようである。また、古墳時代の末葉から奈良時代にかけては、平地化した中でも低い場所には河川のなごりとして自然の小流路が走っていたようである。

弥生時代以来、旧河川（56-OR）は集落形成に重要な役割を果たしてきたと考えられるが、洪水による沖積化は以後の集落形成に大きな打撃を与えたであろう。実際、遺構の数、遺物量は6世紀中頃以降、旧河川周辺の丘陵1では激減している。しかし、後出の窯や若干の遺構等から判断して、集落が完全に廃絶したのではなく、集落の中心部が土地条件のより良好な場所に移動し連続して営まれたと考える方が妥当であろう。

4. 奈良時代（第11図）

奈良時代の集落は、掘立柱建物群が中位段丘面の丘陵1から沖積段丘面の平地部にかけて、大きく4群のまとまりをもって展開する（遺跡西南端で確認された一群は財団法人大阪文化財センターが調査）。

これら建物群はいずれも住居と倉から構成されると考えられるが、建物群の群構造などにはそれぞれで特徴がみられた。

まず、B群では他群を卓越した特徴が看取された。B群では、住居4棟とその背後（北側）に倉4棟が出土遺物・建物の配置・方向の検討により一時期に存在していたことが確認されている。平面的には規則的な建物配置によって構成され、他群と比べると整然とした建物配置をとり、建物規模、群規模も他より卓越していることが判る。さらに、遺物を見ると包含層から出土した土器や瓦礫類は他群を卓越した内容であり、後統期の集落形成（B群周辺で平安時代の建物が顕著である）なども考え合わせると、このB群が大庭寺遺跡の中でも中心的位置を占めていたと考えられよう。

一方、沖積段丘面に位置するA群にも他群にはみられない遺構が存在し注目される。井戸の存在である。この井戸は木枠で組まれ、底には河原石を敷く立派な構造のものであった。A群は立地条件からみれば旧河川（56-OR）の上層にあたり、井戸を築くには好条



第10図 古墳時代の大庭寺遺跡

件を備えていると言える。しかし、古墳時代後期以降の土地状況からみて、この場所が完全に安定していたとは考えられず、居住域としては決して良好な場所ではない。井戸内から出土した「清水」「上」「水」と墨書された土師器皿を考慮すれば、この群で水に関する祭祀行われたことがうかがえる。想像の域を出ないが、集落における水利関係が大きな成立要因と推定される。

また、建物の規模にも若干の差異が認められた。遺跡の東側のA～C群では4～5間×2間の建物が多くみられたが、センター調査区の一群は2～3間の建物が多くみられるようである。

このように、各群はそれぞれで特徴をもち、有機的な関係が推定される。ただ、センター調査区の一群は中心的な時期が8世紀前半、A・B群は8世紀中頃と、群によって若干の時期的なずれもみられ、時期差を含めた詳細な検討も必要とされている。

5. 平安時代（第12図）

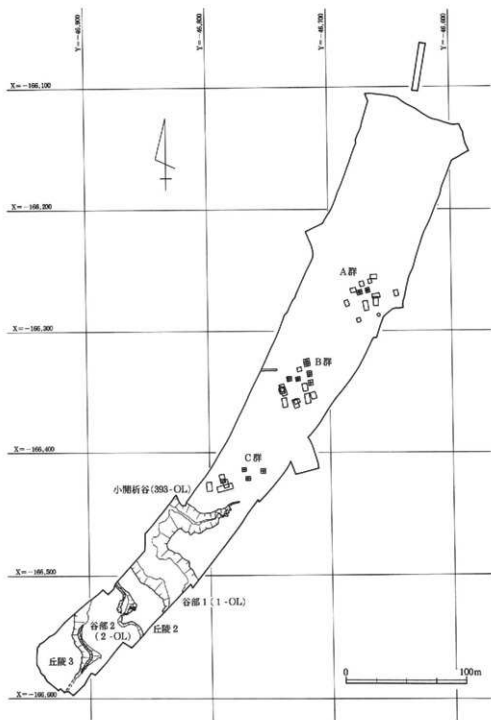
平安時代の集落は、奈良時代のB群の周辺で10棟、中段段丘面に位置するC群の周辺で数棟、センター調査区で9棟の掘立柱建物が確認されている。奈良時代に比べると群の展開力は小さいが、建物規模・出土遺物量から判断して奈良時代同様B群周辺に優位性がみられる。

時期については、遺物量が少なく確実ではないが、比較的遺物の多いB群周辺は9世紀中頃とされ、他群より先行する可能性が指摘される。

6. 鎌倉時代（第13図）

平安時代までの景観とは異なり条里地割方向に沿って溝が計画的に掘削され、区画内に建物が配される。特に区画Aに配された建物群は小溝で区画されるなど整然と配置され、さらには庇構造や規模の卓越する建物も存在し、当期集落の中心的な地区とされている。一方、区画Bには、電を備えた建物や井戸が伴う厨房的な機能を指摘できる建物群、厩など雑舎の可能性が考えられる建物群、瓦器の焼成をうかがわせる土坑などが存在している。作業場的な空間として認識でき、区画Aとは従属的な関係が読み取れよう。

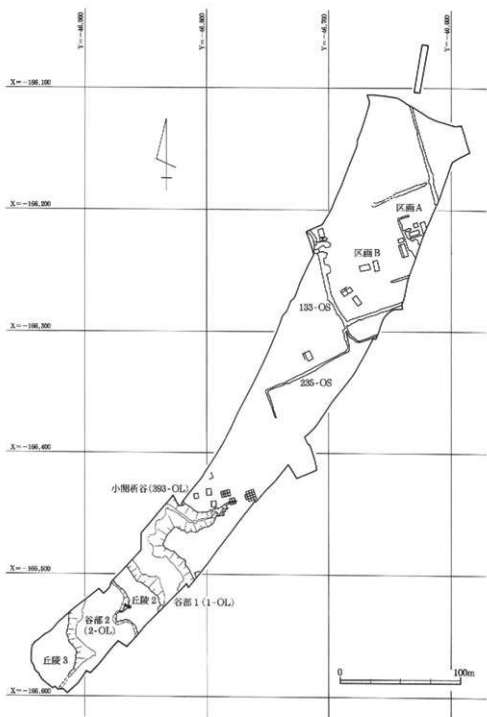
このように計画的に配され開発された集落構造や屋敷地（区画AとB）が1町規模に及ぶ集落規模などからは、一般農民層の集落とは考え難く、権力者層を考える方が妥当とされている。



第11図 奈良時代の大庭寺遺跡



第12図 平安時代の大庭寺遺跡



第13図 鎌倉時代の大庭寺遺跡

第II章 第VII区の調査成果

第1節 調査概要と基本層序 (第14図・図版3)

第VII調査区は、調査区域の北端に位置し(第7図参照)、現在は耕地化され水田が営まれていた。地形分類では石津川の左岸に形成された沖積段丘から谷底段丘上にあたり、各時代の地層が良好に遺存していた。調査は弥生時代の遺構面までを対象に行っている。基本層序 地層は現代の盛り土・現代の耕作土を除き大きく5層に分けられ、さらに細分可能な層もある。

第I層：近世の耕作土である。層厚は0.2m程度で、灰色系の砂混じり粘質土である。

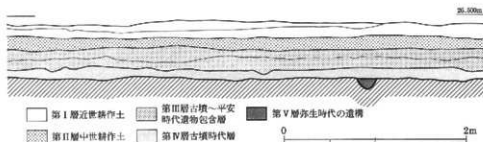
第II層：灰色系の砂混じり粘土で、層厚は0.1~0.15mを測る。中世(15世紀)の水田耕作土と考えられ、出土遺物には瓦器や瓦質土器の出土もみられる。なお、当層上面で近世の耕作(第I層)に伴う小溝群を検出している。

第III層：層厚は0.2~0.3mで2層に細分される。III a層は灰黄色の粘質土、III b層は黄灰色の粘土である。遺物は古墳時代から平安時代に至る土器の細片が出土している。

第IV層：褐色系の粘質土で酸化鉄の沈着や貫入がみられる。層厚は0.1~0.15mである。遺物の出土はみられない。

第V層：灰色の粘質シルトの水成層である。この層の上面で弥生時代の遺構が検出された。調査では当層の完掘まで及んでいないため層厚等は不明であるが、既往の調査によると層厚は0.4mを越え、周辺に広く分布するようである。遺物は出土していない。

遺構面 遺構の検出は第II層上面、第IV層上面、第V層上面で行った。その結果第II層上



第14図 第VII調査区の基本層序

面で近世の耕作跡、第Ⅴ層上面で弥生時代の遺構を検出した。なお、1987年度B地区の調査では第Ⅳ層上面で弥生時代後期の遺構が確認されている。当調査区でも当面で遺構検出を行ったが、明確な遺構の存在は確認されなかった。

第2節 検出された遺構

弥生時代の遺構（第15図・図版3）

弥生時代の遺構は第Ⅴ層上面で検出された。検出された遺構には、溝、土坑、ピットがあるが、このうち明確な遺構は溝1条のみで、他は浅いくぼみ状の落込みである。

溝（14-OS）は調査区南西端から北方向に延び、1989年度に調査を行ったⅣ区Dで検出された14-OSから連続する溝と推定される。溝の断面形は緩やかなU字形を呈し、灰色系粘質土の堆積が認められた。既往の調査成果から中期に属すると思われる。

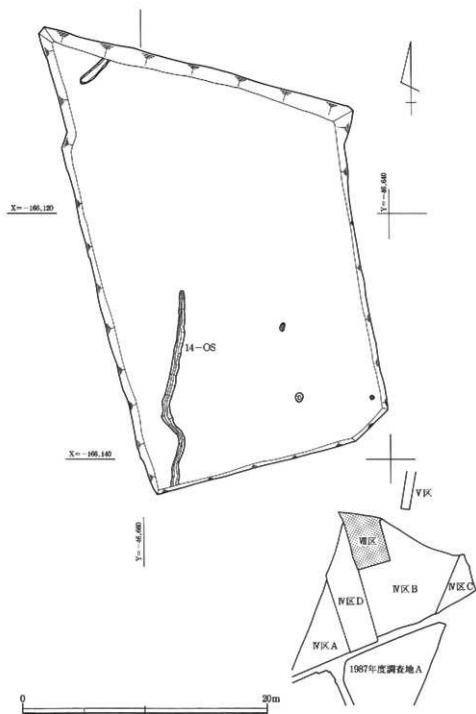
近世の遺構（第16図、図版3）

第Ⅱ層上面で、近世の耕作に伴う小溝群を検出した。溝の方向性から畦畔の存在が予想されたが、明確な畦畔の検出には至っていない。

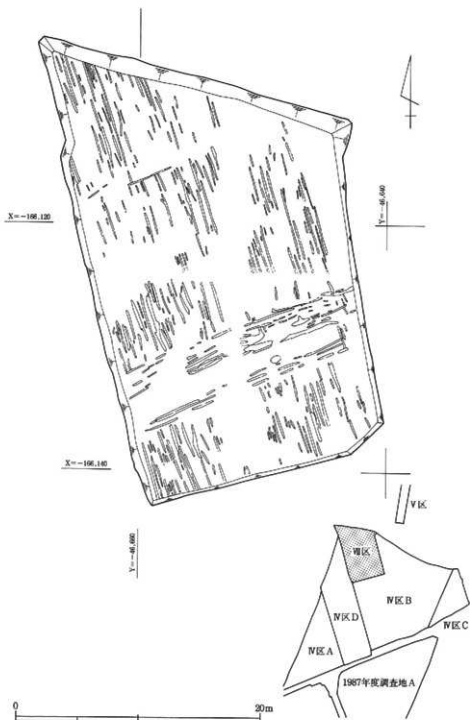
第3節 小 結（第17図）

調査前、第Ⅷ区は調査面積は小さいが、この地区は大庭寺遺跡の中でも弥生時代の遺構が比較的集中する場所として注目されていた。しかし、住居など期待した遺構は検出されず、部分的な補足をしたに留まった。

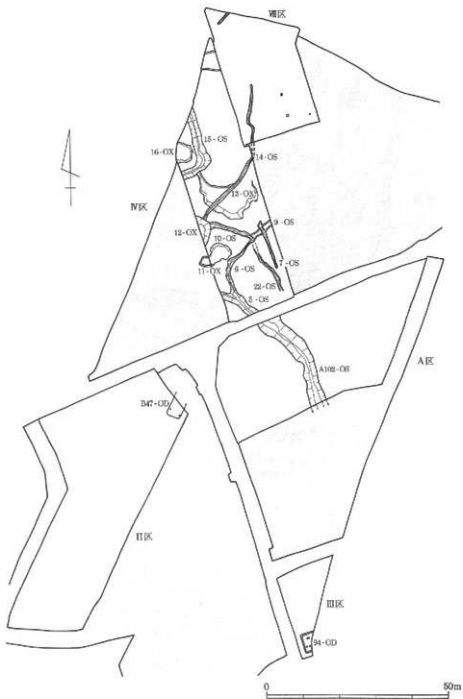
弥生時代の遺構は、旧河川（56-OR）の右岸に立地している。後期には竪穴住居の存在が確認されているが、中期ではその存在は確認されていない。中期の代表的な遺構は旧河川から発すると考えられる溝（5-A102-OS）である。これらの溝群は人為的とするよりは自然流路的であり、平地の中でも低地部を蛇行してのびていた可能性が高いとされる。また、遺構保存のため下層まで調査が及んでいないが、この旧河川と溝間に形成された自然堤防状の微高地上には竪穴住居が営まれた可能性もある。



第15図 第VII調査区弥生時代の遺構



第16図 第VII調査区近世の耕作跡



第17図 平地部で検出された弥生時代の遺構

第三章 第Ⅷ・Ⅸ区の調査成果

第1節 調査概要（第4・7図）

遺跡のはぼ中央に位置する開析谷は、現在遶登ノ池としてその一部を残存させている。この開析谷は丘陵地から石津川に向かって北東方向に開口し、開口部から約110m丘陵地の奥部に入った地点で二本に枝別れし、さらに丘陵奥地まで幅を狭めながらのびている。

本報告では、この二本に枝別れした開析谷のうち東側のものを谷部1（1-O L）、西側のものを谷部2（2-O L）と呼称した。第Ⅷ・Ⅸ区は谷部1（1-O L）に設定された調査区であり、調査地点は開析谷全体でみれば比較的開口部に近い場所にあたる。

谷部1はこれまでも、1990年度と1991年度に調査が行われ、大きな成果が上げられている。1990年度（調査区名Ⅰ区C）は、393-O Lと呼称される小規模な開析谷が調査の対象で、最古型式に属する初期須恵器が数多く出土し注目を集めた。1991年度（調査区名Ⅵ区A）は、谷部1を横断する形で調査を行い初期須恵器や軟質系土器の土器溜りを検出している。

今回はこれらの追加調査となる。位置的にはⅥ区は1991年度に実施した調査区の北側、Ⅸ区は1990年度調査区の東側になる。以下、調査の概要を記す。

Ⅵ区は谷部1を横断する形で調査を行っている。1991年度の調査では、前述した丘陵1側の斜面地で最古段階よりやや時期の下る初期須恵器や軟質系土器の土器溜りを検出し、大庭寺遺跡の展開を考える上で重要な資料を得た。今回の調査でも、まずこの土器溜りの広がりの確認が重要な課題であった。しかし、当調査区では当該期の初期須恵器は出土したものの、既往の調査で確認されたような土器溜りは検出されなかった。次に丘陵2側ではその位置関係から初期須恵器窯T G 232号窯に関連する施設や窯の削平時期が特定できる遺物等の状況証拠の出土が期待された。しかし、この課題についても当調査区では良好な資料は得られなかった。このように当調査区では期待したような成果は得られなかった。ただ、谷の堆積過程は良好な状況で確認され、各時代の谷の活用状況は把握することができている。

Ⅸ区は小規模な開析谷（393-O L）の開口部付近を中心に調査を行った。1990年度の調査では初期須恵器の出土状況から、製品の二次的選別がこの谷近くで行われたことが予

想され、今回の調査でもこの初期須恵器群の出土状況に注目した。さらに、前回の調査では激しい湧水のため観察が難しかった谷の堆積状況の把握にも力を入れた。その結果、初期須恵器が良好な状況で出土し一括性の高い遺物群が抽出された。また、谷の堆積状況も良好な状態で観察することができ、古墳時代中期の遺物が包含される堆積層や古墳時代後期における谷底面をはじめとして各時代の堆積状況が把握された。これらの成果から集落と小開析谷の有機的な空間関係も把握された。

第2節 谷部1（1-O L）の調査

第1項 谷の概要（第4・18・19図、図版4）

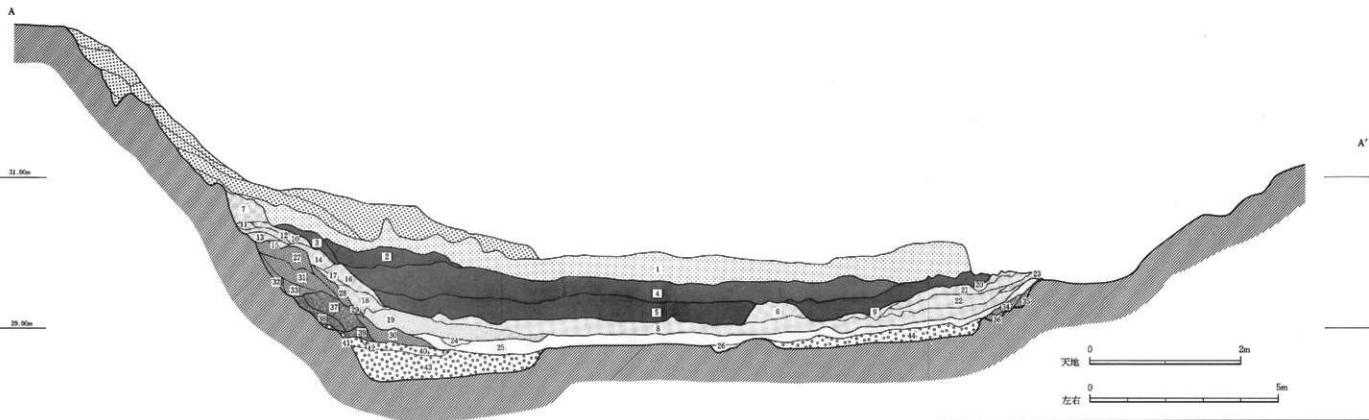
前節で触れたように谷部1（1-O L）は、二本に枝分かれした開析谷のうち東側に位置するものである。

調査地点での幅は上端部で約35m、下端部で約16mを測る。丘陵地との比高差は丘陵1側で4.2m、丘陵2側で2.5mほどあり、丘陵1側では人間が容易に登れない崖面も存在する。また、丘陵2は最低でも1.5～2mは後世に削平されており実際にはもう少し急斜面であったと推定される。

谷の底面は比較的平坦で、開口部に向かって徐々に低くなる。遺構はこの底面で蛇行しながら走る弥生時代～古墳時代前期の自然流路が検出されている。流路（801-O S）は深さ平均0.4mほどで、褐色系の粗砂の堆積がみられた。平常時には谷上流から湧き出す少量の水が流れていたものと推定されるが、古墳時代中期には痕跡をわずかにとどめる程度となり、そのほとんどは埋没しているようである。流路内からの遺物の出土は少ないが、弥生時代後期末から古墳時代前期の土器を数点（1～5）図示している。

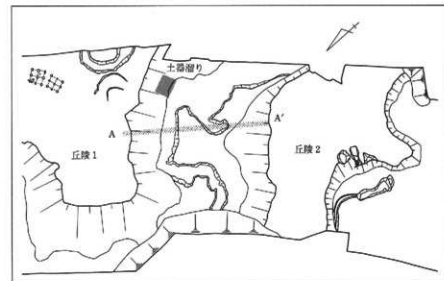
谷部1ではこの流路以外に明確な遺構は検出されていない。丘陵1側の斜面では比較的初期須恵器などの遺物がまとも出土した地点もあるが、前回の調査で検出されたような明確な土器溜りの存在は認められなかった。むしろ、前調査区（第VI-A）における出土状況の様相を重視すると、前調査区の南側、谷奥部での密な遺物の出土が予想される。当該期の集落が、丘陵1の南側の平坦地（I-C区の南側）まで広がって展開することも予想されよう。

その他、谷部1の堆積地層の状況からは各時代における谷の様相も明確となったが、堆積状況とその出土遺物は次項で概観する。



- 第Ⅰ層現代の崩落土
- 第Ⅱ層現代の堆積土
- 第Ⅲ層近世の堆積層
- 第Ⅳ層中世の堆積層
- 第Ⅴ層古墳時代末の堆積層
- 第Ⅵ層古墳時代後期の堆積層
- 第Ⅶ層古墳時代中期の堆積層
- 第Ⅷ層弥生時代後期～古墳時代前期の溝

- | | | |
|------------------------------|-----------------------------|------------------------------|
| 1. 10YR 5/2 灰黄色粘質土 | 16. 7.5YR 3/2 黒褐色粘土 | 31. 2.5YR 4/2 灰赤色粘質土 |
| 2. 5YR 4/2 灰褐色粘質土 | 17. 5YR 4/1 褐灰(褐色)色粘土混じり砂礫土 | 32. 7.5YR 6/1 褐色粘質土 |
| 3. 10R 4/1 暗赤灰色粘質土 | 18. 7.5YR 3/3 暗褐色粘土 | 33. 10YR 3/3 暗灰色粘土混じり砂礫土 |
| 4. 2.5YR 4/3 にぶい赤褐色粘土 | 19. 10R 4/4 赤褐色粘土 | 34. 2.5YR 4/2 暗赤色粘土混じり砂礫層 |
| 5. 5YR 3/4 暗赤褐色粘土 | 20. 5YR 5/4 にぶい赤褐色粘土 | 35. 2.5YR 5/4 にぶい赤褐色粘土混じり砂礫層 |
| 6. 10YR 4/3 にぶい黄褐色粘土 | 21. 10YR 3/4 暗褐色粘土 | 36. 7.5YR 4/2 灰褐色粘土混じり砂礫層 |
| 7. 7.5Y 4/1 褐色粘質土 | 22. 5YR 5/2 灰褐色砂礫層 | 37. 5Y 4/1 灰色粘質土 |
| 8. 5YR 3/4 暗赤褐色粘土 | 23. 5Y 4/1 灰色粘質シルト | 38. 10Y 5/1 灰色粘質土 |
| 9. 2.5Y 5/1 黄褐色粘土 | 24. 10YR 3/3 暗褐色粘土 | 39. 7.5YR 4/3 褐色砂混じり粘質土 |
| 10. 10YR 4/1 褐色粘質土 | 25. 10Y 4/3 赤褐色砂 | 40. 10YR 6/1 褐灰(褐色)色粗砂混じりシルト |
| 11. 5BG 4/1 暗青灰色粘土 | 26. 10BG 5/1 青灰色砂礫土 | 41. 5YR 6/4 にぶい灰色粘質シルト |
| 12. 7.5YR 6/2 灰褐(褐色)色砂礫混じり粘土 | 27. 5YR 5/1 褐色粘質土 | 42. 5YR 4/2 灰褐色粘質シルト |
| 13. 5YR 6/1 褐色粘質土 | 28. 2.5Y 4/1 暗赤黄色粘質土 | 43. 5YR 3/3 暗赤褐色粘砂 |
| 14. 2.5YR 4/2 灰赤色砂礫土 | 29. 7.5YR 3/3 暗褐色砂混じり粘質土 | 44. 10R 4/3 赤褐色粘砂 |
| 15. 10R 3/1 暗赤灰色砂礫土 | 30. 2.5YR 4/3 にぶい赤褐色砂混じり粘質土 | |



第18図 谷部1 (1-O-L) 土層図

第2項 谷の堆積過程と出土遺物

1. 堆積状況（第18図、図版5・6）

谷部1（1-O L）の堆積土は、中央部で約1.2mの厚さを測る。おおまかな堆積状況は、中央部では水平な堆積、斜面地やその周辺では丘陵地方向からの堆積が観察された。以下、各層の基本的な堆積状況について詳説する。

第I層：現代の斜面崩落土である。

第II層：現在溜池として利用されている濃登ノ池に伴う谷底堆積層である。

第III層：近世の堆積層である。暗褐色系粘土が約0.5mの層厚で水平に堆積する。植物遺体のみられ、近世に溜池として利用された際、渇水期には湿地化していたことがうかがえよう。

第IV層：中世の堆積層である。両斜面下端部から谷底全体に広がり、谷底部では褐色系の粘土の水平堆積が、丘陵1の斜面地では丘陵からの砂礫土の崩落堆積が認められる。また、谷底に広がる堆積層（第8層）の様相、畔状に盛り上がる層（第6層）の存在、丘陵2側の斜面地の堆積が人為的な整地層の可能性のあることから、この谷が中世には耕作地として利用されていたことが指摘される。

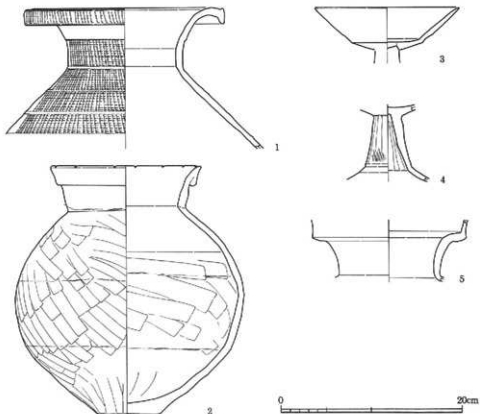
第V層：古墳時代末に堆積した褐色系の砂層である。層厚0.15～0.2mで谷底全体に広く分布する。流水に伴う土砂堆積と考えられる。

第VI層：斜面地の堆積層で、古墳時代中期から後期の遺物の出土がみられる。両丘陵に分布するが、特に丘陵1側での堆積が顕著である。

第VII層：VI層と同様、斜面地の堆積層である。古墳時代中期に形成された地層で丘陵1側のみで認められる。平面的な分布は、調査区北西端までは及ばず、第18図に示した土層観察用の畔周辺から急に薄くなるようである。前報告の初期須恵器土器溜りは当層の上面で検出されている。

丘陵1側で顕著にみられたこのVI層・VII層の堆積は、丘陵1上に展開する集落に伴う開発が大きく関係していると考えられる。このことは、丘陵における遺構の分布状況だけでなく、斜面地における遺物の出土が丘陵1側で顕著であることなどからも明らかである。第VIII層：弥生時代から古墳時代前期の自然流路の堆積層である。前報告では弥生時代流路としたが、遺物整理の進捗により、この流路は古墳時代前期まで機能していたことが明らかとなった。本報告で訂正しておく。

以上の堆積状況概観から谷部1の変遷が捉えられた。



第19図 谷部1（1-O-L）自然流路801-0 S出土遺物

谷底を流れる自然流路は古墳時代中期にはそのほとんどが埋没しているようであるが、当期ではまだ谷底全体を覆うような地層の堆積はみられない。谷底全体に堆積が認められるようになるのは第Ⅴ層、古墳時代末以降からである。しかし、この第Ⅴ層も流水に伴い砂層が薄く堆積したのみで、当開折谷は弥生時代以降古墳時代末までは大きな状況の変化はなく、自然の開折谷として機能していたことがうかがえる。

谷部1で堆積の状況が一変するのは第Ⅳ層、中世以降である。

堆積層の様相からは耕作地として開発された状況がうかがえよう。さらに、近世に至っては第Ⅲ層の状況から長期にわたる滞水状況が観察された。この時点に至り、溜池化した現在とあまり変わらない様相を呈していたと推定される。

また、谷部1では奈良時代や平安時代の堆積層や遺構は確認されなかった。しかし、谷が開口する旧河川（56-O-R）は奈良時代には沖積平地化し集落が営まれ始める。さらに

耕地化したことも予想される。調査域では検出されていないが、耕地化に伴い水利関係の開発が谷部を利用して行われた可能性も当期には考慮しておく必要がある。

2. 出土遺物（第20～26図）

谷部1（1-O L）の出土遺物は谷中央部、丘陵1側斜面部とその下端付近、丘陵2側斜面部下端付近の地点毎（第18・20図参照）に分けて図示した。以下、簡単にその様相を概観する。

中央部出土遺物（第21図6～12）

中央部からの出土品は細片が多く、図化できたものは少ない。6・12は第Ⅲ層、7・11は第Ⅳ層、10は第Ⅴ層からの出土である。

6は近世の陶磁器で第Ⅲ層の堆積時期をうかがい知る資料である。7～12は古墳時代～奈良時代の須恵器で、堆積時期が反映されたものではない。なお、初期須恵器は少なくとも1点のみが図化された。

丘陵2側斜面部出土遺物（第21～23図13～30）

13～16は丘陵2側斜面でも調査区の南端付近から出土した古墳時代後期の須恵器である。出土層は第Ⅵ層である。初期須恵器も数点出土しているが、いずれも細片で図化されなかった。

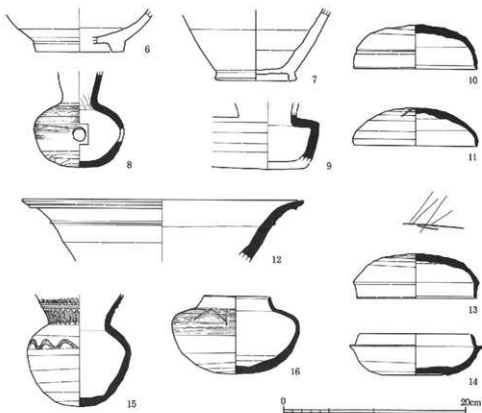
17～30は丘陵2側でも調査区の北端付近の第Ⅵ層から出土した遺物である。

サマカイト製のスクレイパー（17）、古墳時代後期の須恵器（18・19）も出土しているが、この地点では初期須恵器（20～30）の出土が顕著であった（第20図参照）。特に大型甕の出土比率が高く、口縁端部の形状、口頸部に施されたハケ目（28・29）、頸部中央に巡らす凸帯（30）などの諸特徴からは、当遺物群はT G 232号窯で焼成された製品であると認識された。

しかし、これらがT G 232号窯の操業時に伴うものか、それとも後代の窯削平時に伴うものかの判断を行うまでには至っていない。ただ、削平時に伴うものならば窯の窯壁片が層中から多量に出土すると予想されるが、この地点ではその数は少なく、現時点では窯の操業時に伴う可能性の方が高いとされよう。



第20図 谷部 1 における初期須恵器の出土分布



第21図 谷部1 (I-O L) 中央部・丘陵2側斜面部出土遺物

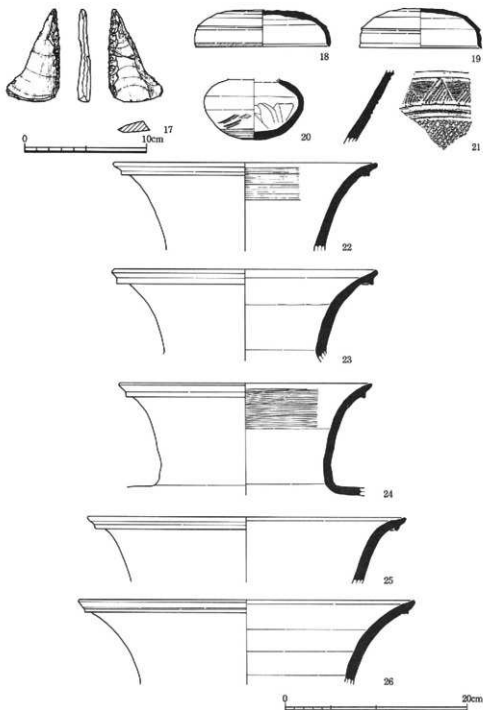
丘陵1側斜面部出土遺物 (第24~27図31~80)

31~53は第IV層, 54~69は第VI層, 70~80は第VII層からの出土品である。

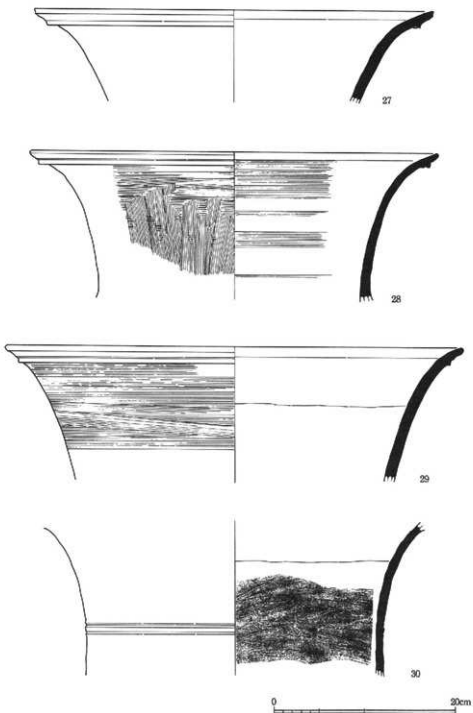
IV層は中世の堆積層であるが, 出土した遺物の多くは古墳時代のものであった。31~40は古墳時代後期の須恵器, 41~49は初期須恵器, 50・51は軟質系土器, 52・53は土師器である。

第VI層からの出土遺物は後期の須恵器 (54~59) と初期須恵器 (60~69) がほとんどで後期以降のものは出土していない。なお, 出土数は上層よりも初期須恵器が増加する傾向がある。

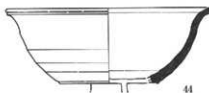
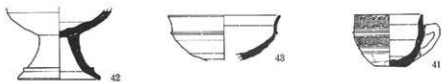
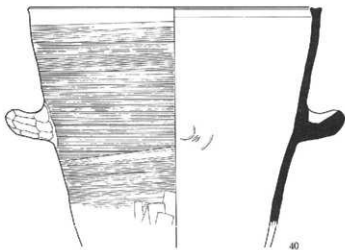
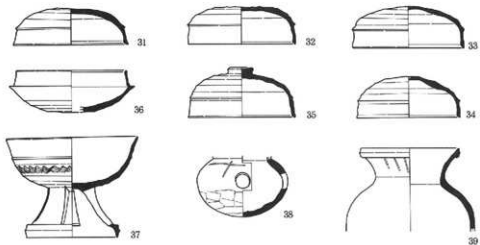
第VII層からの出土遺物はそのほとんどが古墳時代中期のもので占められる。初期須恵器 (70~80) では蓋や高杯などの小型製品の出土が顕著となり, 大型甕などの大型品の出土は少ない傾向にあった。初期須恵器以外の遺物は少ないが, 同時期の軟質系土器の平底鉢



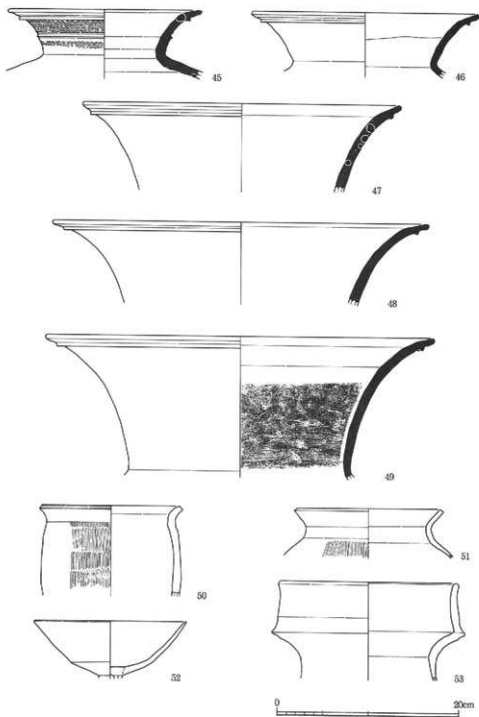
第22図 谷部1 (1-OL) 丘陵2 側斜面部出土遺物



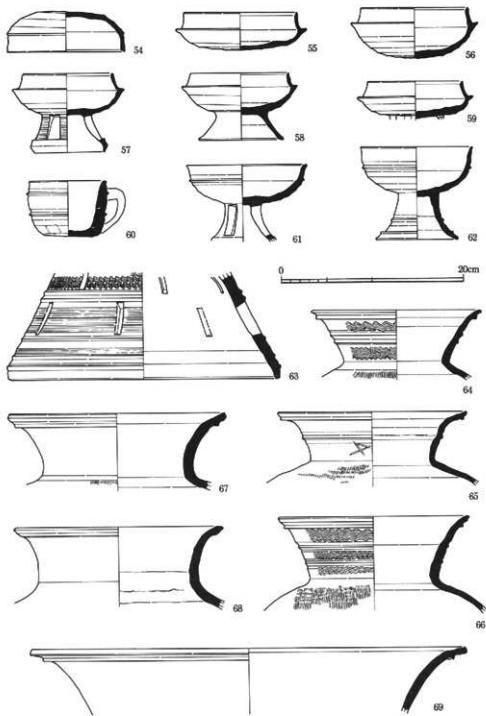
第23圖 谷部1(1-O-L)丘陵2側斜面部出土遺物



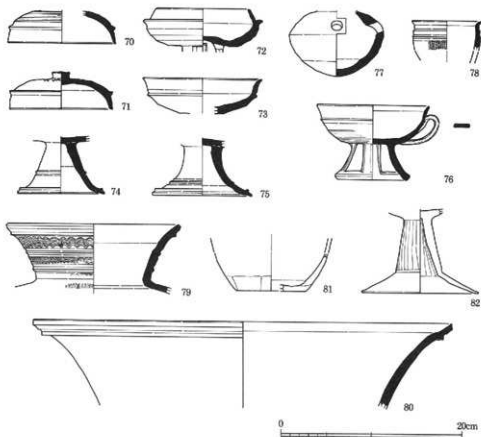
第24圖 谷部1 (1-O-L) 丘陵1 側斜面部第IV層出土遺物



第25図 谷部Ⅰ(1-O-L)丘陵Ⅰ側斜面部第Ⅳ層出土遺物



第26图 谷部1(1-O L)丘陵1側斜面部第VI層出土遺物



第27図 谷部1(1-O-L)丘陵1側斜面部第Ⅶ層出土遺物

(81)や土師器高杯(82)がある。

このように、丘陵1側斜面部では初期須恵器の出土が顕著であった。その所属年代については須恵器の諸特徴から土器溜り出土の初期須恵器と同時期でT K73~216型式併行期とされ、最古型式まで遡るものはほとんどない。

また、初期須恵器の分布では中世の第Ⅳ層では比較的広い範囲でみられたが、古墳時代以降の堆積である第Ⅵ・Ⅶ層では調査区南端付近に集中する傾向が認められた(第20図分布図参照)。

前にも触れたが、この遺物が集中する南東には当該期の土器溜りが存在し、丘陵上には当該期の集落展開が確実視される。この一群にもこの集落が大きく影響しているものと考えられ、この付近が谷部1における土器の投棄範囲の北限とされよう。

第3節 小開析谷（393-O L）の調査

第1項 谷の概要（第28図，図版6・7）

丘陵1から谷部1に向かって開析された小規模な谷である。現在は埋没し部分的に耕作地として利用されていたが、周辺の丘陵地より1mほど低く谷地形の名残りは認められた。

谷の全長は約38mで、中央部付近で若干屈曲する。谷幅は谷奥から屈曲部までは徐々に広くなり、屈曲部から開口部付近で急激に幅を広げる。屈曲部での幅は約20mで、谷と丘陵地との比高差は当地点で約5mを測る。断面形は全体的にみると緩やかな「V」字形を呈するが、中腹にやや平坦な段が巡り、底部にかけてはさらに深い「V」字形を呈する。ただ、屈曲部から開口部付近では、底は緩やかな「U」字形を呈し、谷幅とともに底幅も広くなる傾向にある。谷底の開口部と谷奥の比高差は約2mあるが、傾斜角度は谷奥ほど急傾斜で、開口部付近では比較的緩やかである。

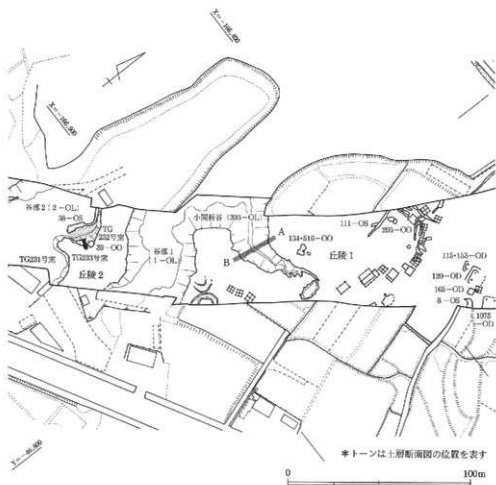
また、丘陵1には奈良時代までは機能していたと推定される谷への流入路となる溝が続いている。

谷における地層の堆積は、小規模な谷のためか各時代とも厚い。前回の調査では激しい湧水のため充分に把握できなかった弥生時代から近世に至る堆積の状況も良好な状態で観察され、その結果、谷底部では古墳時代中期だけでなく後期面の存在が認識されるなどの新成果も追加された。

さらに、今回の調査では、谷の堆積状況の把握と共に遺物の出土層位や出土状況の検討も良好な状況で行うこともできた。

前調査では当谷から最古型式に属する初期須恵器が多数出土し、その状況から判断して、窯周辺で行われる一次選別（窯だし時に行われる粗い選別で多くは灰原に廃棄される）とは別に、谷周辺で二次的な選別（一次選別に比べ細かな検品）が行われたことが推定されるに至っている。今回の調査ではこれに加え、谷底に一括して投棄された日常の土器群（軟質系土器や土師器）が良好な状況で検出され、選別だけでなく生活の一部を担う場所として谷部が利用されていたことも確認した。その他、古墳時代後期の祭祀に伴うと推定される土器群も検出され、弥生時代以降の丘陵上に展開する集落と当谷の有機的な関係が明らかとなってきた。

なお、前述した地層の堆積、出土遺物については、後項で概説し、谷の堆積過程や集落における谷の役割なども検討する。



第28図 粟・谷・集落の位置関係

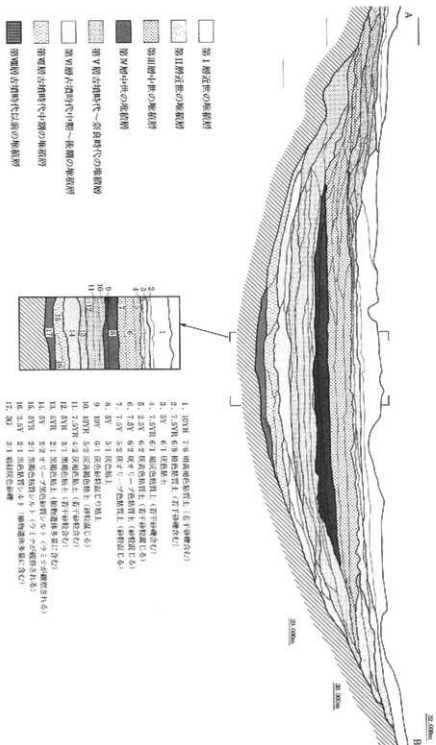
第2項 谷の堆積過程 (第29図, 図版7~12)

開折谷 (393-OL) の地層の堆積は、屈曲部付近で約3mを測り、大きく8層に大別された。以下、各地層の堆積状況について概説する。

第I層：近世の耕作に伴う地層である。数は少ないが初期須恵器の出土もみられる。

第II層：近世の堆積地層である。谷の東端は乱堆積であるが、中央部は灰色系の粘土がほぼ水平に薄く堆積する。東端部は自然堆積、中央部は耕作に伴う地層の可能性が高い。中・近世の遺物の他、第I層同様初期須恵器の出土もみられる。

第III層：中世の堆積地層である。東端部は斜面の傾斜にそった斜面地堆積の状況がうかがえ、中央部では層厚約0.5mに及ぶ灰色系粘質土の水平堆積がみられる。中央部は耕作に



第29図 小関折谷 (393-O L) 土層図

伴う地層、東端部は耕作に伴う整地地層の可能性が高い。遺物は瓦器碗や土師器皿の他、初期須恵器の出土もみられる。ただ、第Ⅰ～Ⅲ層出土の初期須恵器はそのほとんどが小破片となって出土している。

第Ⅳ層：灰色の粘土層である。谷中央部に分布し、層厚は中央で約0.3mを測る。出土遺物から中世の堆積地層と考えられる。層の上端面がほぼ水平であり、中世における耕作化に伴い整地された可能性が高い。

遺物は古墳時代中期から鎌倉時代までのものが出土しているが、上層より奈良・平安期の遺物が増加する傾向がみられる。

第Ⅴ層：古墳時代～奈良時代の堆積地層で、上層（第Ⅴa層）と下層（第Ⅴb層）に細分される。上・下層とも黒褐色系の粘質土であるが、下層の方が黒味が強い。

さらに、両層を比較すると、下層（第Ⅴb層）には植物遺体が多く含まれる特徴が観察された。一時期、下層の上面が谷の底面となり、植物遺体などの状況から判断して、湿地化していたことがうかがえる。一方、上層（第Ⅴa層）は層厚約0.4mで、下層に比べると厚い堆積が認められた。徐々に堆積した地層とは考え難く、短期間に堆積したものと推定された。想像の域を出ないが、奈良時代の丘陵開発に伴い廃棄された土砂の可能性もあろう。

遺物は両層とも初期須恵器から奈良時代に至るものが出土しているが、特に下層（第Ⅴb層）では古墳時代後期の須恵器が上層に比べ増加する傾向がみられた。さらに、完形品に復元されるような大型破片も含まれるようになる。これは、第Ⅴ層の直下に堆積する第Ⅵ層の影響が大きく、実際には発掘中に完全に分離できなかった第Ⅵ層の遺物も部分的には含まれているためと推定される。

第Ⅵ層：古墳時代中期～後期の堆積地層である。谷中央（14層）は黒褐色系のシルト、斜面にかけては黒褐色系の粘質土の堆積がみられ、谷中央ではラミナが観察された。層厚は中央部が最も厚く約0.4mを測る。

このⅥ層上端面では古墳時代後期の須恵器が集中して出土した場所が確認されている。蓋杯や高杯が意図的にまとめて廃棄されたような出土状況を示しており、何等かの祭祀に関係するものと推定された。また、この須恵器群の出土によって、当層の上端面は古墳時代後期に谷の底面であったことも明確となった。

一方、Ⅵ層中の出土遺物であるが、古墳時代後期の須恵器の他、初期須恵器や日常土器である軟質系土器や土師器の出土が当層より急増する傾向がみられた。さらに、初期須恵

器の中には完形に復元されるものも含まれるようになる。

第Ⅶ層：古墳時代中期の堆積地層である。谷中央では黒色系の粘質シルト、谷西端では黒色系の砂土の堆積がみられ、シルト層ではラミナが観察され、下層の16層には植物遺体が多量に含まれていた。

遺物は初期須恵器をはじめとして、軟質系土器、土師器が多数出土している。特に、屈曲部付近の下層からは、完形品に近い軟質系土器や土師器が投棄された状況で出土しており、一括性の高い土器群として認識された。

第Ⅷ層：谷の最下層に堆積する緑灰色の砂礫である。遺物の出土はみられず、明確な時期はわからない。

以上、各層を概観したが、当谷の堆積過程についてまとめておく。

当谷で土砂の堆積が顕著にみられ始めるのは古墳時代中期以降である。それまでは谷の水流に伴って若干の土砂は運搬されているが、堆積するまでには至っていない。

大庭寺遺跡では古墳時代中期に前代とは比較にならないほど集落規模が拡大する。丘陵上における遺構の残存状況は悪いが、当期に丘陵開発が大規模に行われたことは間違いない。古墳時代中期（第Ⅶ層）の堆積はこの集落開発が大きく影響していると推定される。具体的に推測すれば、降雨時の集落排水などにこの谷が利用され、第Ⅶ層は谷部に丘陵上から土砂が多量に流れ込んだ状況を示す言えよう。さらに、谷は、集落排水に留まらず、水確保の場や土器の廃棄場としても積極的に利用され、集落の重要な位置を占めていたことも推定される。

中期以降も後期までは、前述した状況に変化なく地層の堆積は続いたようである。そのため第Ⅵ層では、初期須恵器を中心とした土器と後期の須恵器が混在した出土状況がみられると推定される。つまり、谷への遺物の廃棄状況を考えると、後期と中期の遺物が同時廃棄されたのではなく、後期には部分的であるが中期の遺物が谷に散在した状況を呈しており、この上に後期の遺物が廃棄されたり、第Ⅵ層が堆積したものと推定されよう。

さらに、出土状況に意図的なものを示す須恵器の存在から、谷で祭祀が行われたことが把握されるとともに、後期でも6世紀前半までには第Ⅵ層は堆積し、第Ⅵ層上端面が当該期の谷底であることも認識された。須恵器群の出土によって古墳時代後期の谷底が面として捉えられたのである。

古墳時代後期以降の谷底については、奈良時代で認識される。第Ⅴb層である。当層には、前代の第Ⅵ・Ⅶ層にみられたラミナはなく、層中に植物遺体が多く含まれるなどの様

相から、当期には池状に湿地化していたことがうかがえた。

上層の第Ⅴa層については、第Ⅴb層に比べると層厚が厚い、植物遺体が含まれないなど、むしろ人為的な様相が感じられた。奈良時代以降に丘陵1が平坦化したことを重視すれば、第Ⅴa層は開発に伴い丘陵から人為的に搬出された土砂堆積の可能性が高いとされよう。

このように奈良時代には、開析谷本来の機能は失われつつあり、さらに中世に至っては部分的にはあるが耕地化が進み、完全に開析谷としての機能は失われるようである。ただ、鎌倉時代には谷斜面にあたる場所に井戸（曲物を井筒として利用したもの）を掘削しており、水源として谷を利用していたようである。

第3項 出土遺物

谷部からは、古墳時代中期から近世に至る各期の遺物が多量に出土しており、ここでは上層から順に各層毎に図示している。また、第Ⅵ層上端面で出土した須恵器群、第Ⅶ層下層で出土した一括性の高い投棄された遺物群も、ここで合わせて図示している。以下、各層毎に概観する。

なお、大庭寺遺跡の初期須恵器は、これまでの調査によって時期差のある遺物群の存在が確認されている。その代表例が一括性の高いTG232号窯（以下TG232号）と1-O土器溜り（以下土器溜り）の資料であり、前者は最古型式（TG232号型式）として認識され、後者はやや遅れるTK73~216型式に位置づけられている。

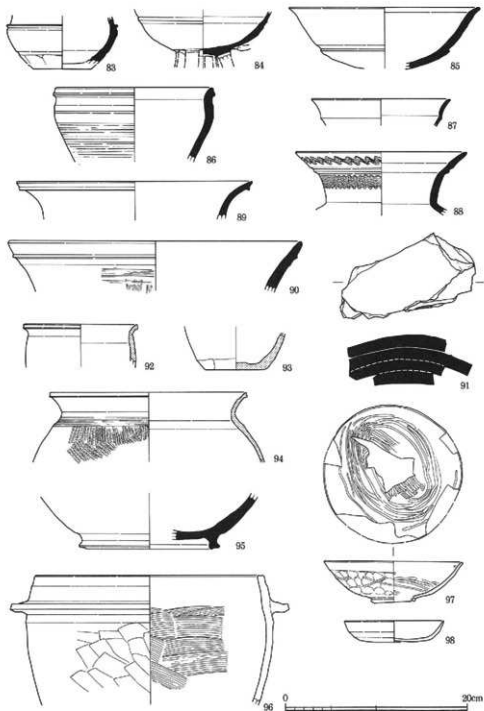
当谷の出土遺物にも両期のものが存在しており、ここでは両遺構からの出土品を基準にして概観していく。ただ、形態の特徴からみて、TG232号型式の範疇で捉えられるが、TG232号窯よりは若干形態変化の進行したと考えられるものも存在する。そのため、当谷の出土品は便宜上、TG232号型式の範疇で考えられる形態を先行形態、土器溜りの時期に併行する形態のものを後出形態として記述していく。

初期須恵器に伴う軟質系土器も同様の基準で概観する。

1. 第Ⅰ層出土遺物（第30図83・89）

第Ⅰ層では古墳時代中期から近世までの遺物が出土しているが、多くのものは細片で堆積時期を示す近世の陶磁器については図化できなかった。

ここでは初期須恵器2点（83・89）を図示した。



第30圖 谷部1 (393-O L) 第I~III層出土遺物

2. 第II層出土遺物 (第30図88・94・96)

古墳時代中期から近世までの遺物が出土しているが、ここでは図化された古墳時代中期と近世の遺物を示した。初期須恵器の広口壺88は二重口縁壺的な口縁部を呈するが、大庭寺遺跡の中では類例の少ない形態である。94は軟質系土器の長胴甕で、体部には縄縞タタキが施される。96は土師質の羽釜である。

3. 第III層出土遺物 (第30図84～87・90～93・95・97・98, 図版35)

古墳時代中期から中世までの遺物が出土している。84～87・90は初期須恵器の範疇で考えられるものである。特に大型甕90は頸部にTG232号の甕と共通するハケ調整がみられ、先行形態に位置づけられる。92・93は軟質系土器の平底鉢で、いずれも小型の製品である。91は大型甕の体部片を4片重ねたもので、破断面に軸の付着が観察され二次的な焼成がうかがえる。窯道具の一種、焼き台あるいは詰め具として利用されたものであろう。95は奈良時代の須恵器壺、97は瓦器碗、98は土師器皿である。

なお図示した遺物の中では、97の瓦器碗が当層の堆積時期を示す代表的な遺物である。

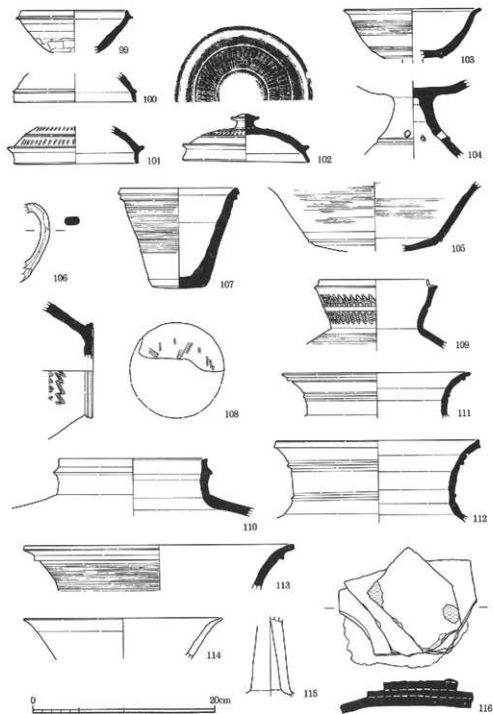
4. 第IV層出土遺物 (第31～33図99～132, 図版35・36)

古墳時代中期から中世に至る遺物が出土しているが、上層と比較すると古墳時代後期や奈良時代の遺物の出土割合が増加する傾向がある。古墳時代中期の遺物は第31図、古墳時代後期～中世の遺物は第32・33図に示した。

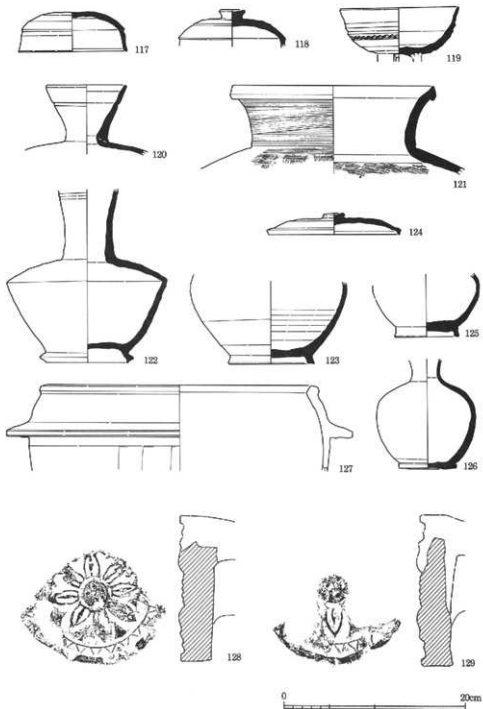
99～113は初期須恵器の範疇で考えられるものである。杯99は、平底の底部から体部が開きながら直線的にのびる器形のものである。大庭寺遺跡での出土数は少ないが、TG232号に類似例がある。100～102は高杯の蓋である。このうち100は、天井部と口縁部の境を巡る凸帯が鈍い、天井部が無紋であるなどの諸特徴から101・102より後出すると考えられる。高杯は3点(103～105)図示したが、このうち105は土師器の器形に影響を受けたと考えられるものである。106は把手付碗の把手部で、断面形は板状を呈する。樽形甕は1点図化された(108)が、当谷での出土数は極めて少ない器種である。壺は蓋受を有するもの(109)や口頸部に凸帯を巡らすもの(111・112)などがある。

114・115は土師器高杯である。116は大型甕の体部片を重ねて、焼き台として利用したものである。上面には製品との分離時に生じた欠損傷が観察される。

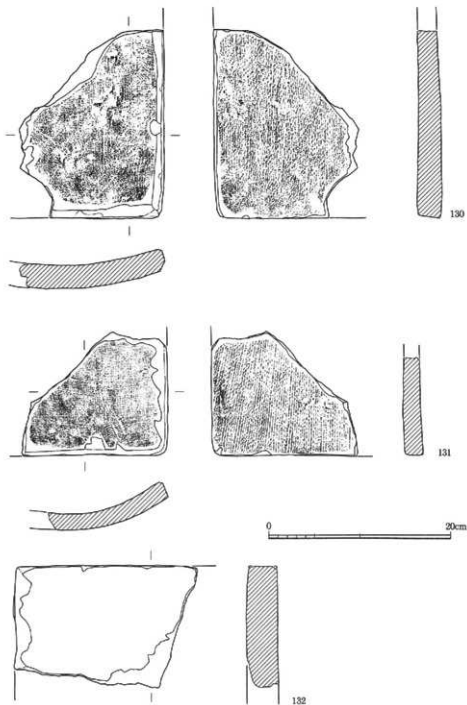
117～121は古墳時代後期から末葉の須恵器である。117～119・121はTK47～MT15型



第31图 谷部1 (393-O L) 第IV層出土遺物1



第32図 谷部 I (393-O L) 第IV層出土遺物 2



第33圖 谷部1 (393-O L) 第IV層出土遺物3

式併行期、120はTG233号窯の操業期であるTK209型式の後半期にはほぼ併行する時期と考えられる。122～125は奈良時代、126は平安時代の須恵器である。

中世の遺物は図化可能なものが少なく、土師質羽釜(127)を図示した。口縁端部を丸く肥厚させる特徴から、時期は14世紀前半～中頃と考えられる。

その他、第IV層では瓦磚類も出土している。128は復元直径16cmを測る重弁八葉蓮華紋軒丸瓦である。外区には鋸歯紋巡り、内区中房には5個の蓮子を配する。129も残存部から128と同型式と確認される。130・131は平瓦である。いずれも凸面に縦方向の縄タキが残り、凹面には布目が残る。132は磚である。仕上げの調整は残存状況不良のため詳細に観察できないがナゲ調整と推定される。瓦磚類の時期は、いずれも8世紀中頃と考えられる。

5. 第V層出土遺物(第34～37図、図版36～40)

第V層からは古墳時代中期から奈良時代に至る遺物が出土しているが、上層に比べ遺物の総出土量が増加し、完形復元される土器もみられるようになる。以下、各時代で種類・器種に分けて概説する。

初期須恵器(第34・35図、図版36～38)

小型鉢(133)

体部は平底の底部から大きく開いて直線的のび、口縁部はやや上方に屈曲させる。仕上げ調整は、口縁部を回転ナゲ、底部を静止ヘラケズリによって行うが、体部には器形成形時調整のタキ目をそのまま残存させている。さらに、胎土は通常の須恵器と異なり砂礫が多く含まれており、全体的にみても粗製品といえる。遺跡内における出土例はほとんどない。

把手付椀(134～136)

体部が内湾して外方向にのびるもの(134・136)と直線的のびるもの(135)がある。さらに前者には、器高の低いもの(134)と高いもの(136)が存在し、口径と器高の比率、口縁端部形態、器厚を薄く一様に仕上げるなどの諸特徴からは136が型式的に先行すると考えられる。

把手は残存例が少ないが、完存した135には重厚なつくりのものが付けられている。その他、把手上端部には134に小豆状、135には渦巻状装飾が付加されている。底部の調整は

いずれも静止ヘラケズリによるが、135・136は比較的広い範囲に施している。

高杯 (138~149)

高杯は図化できた多くが脚部片である。杯部で示した有蓋高杯138・139はいずれも深い杯底部をもち、たちあがりは内傾し低いものである。また、定型化以後の製品に比べ器壁が厚い特徴も看取される。完形復元された無蓋高杯140は、体部が外方向に大きく開きながらのびる鉢状の杯部に「ハ」の字状に開く低い脚部を付けるものである。類例の知られていない器形で、杯部の形状や脚部に縦方向の粗いミガキ状の調整を施すなど、土師器の影響を受け製作された可能性が高い。

脚部は9点図示した。最も出土数の多いものは、柱部から裾部が大きく開き、裾上端部に凸帯を巡らせる形態(142・143・146~148)である。この形態はTG232号の脚部E類の範疇に含まれ、前報告で検討したように(『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』「第七章・第4節1-O出土の初期須恵器」)その特徴から142・143が146・147に先行するものと考えられる。この他では、三角透かしを4方に配し有蓋高杯に伴うと推定されるもの(141)、脚裾上端に凸帯を巡らさないもの(145・149)、裾内面に土師器にみられるハケ調整を施すもの(144)などがある。

甗 (150~152)

完形復元された150は、頸部から段をつかって外上方にまっすぐのびる口縁部をもつ、底体部の最大径がほぼ中央にある、底部内面には丸底成形のための押圧痕が顕著に残存するなどの特徴がある。一方、152は底体部のみの残存であるが、最大径はやや上方にある、器厚が薄い、底部内面の仕上げにナデ調整を施すなどの特徴がみられ、150に先行する形態と考えらる。

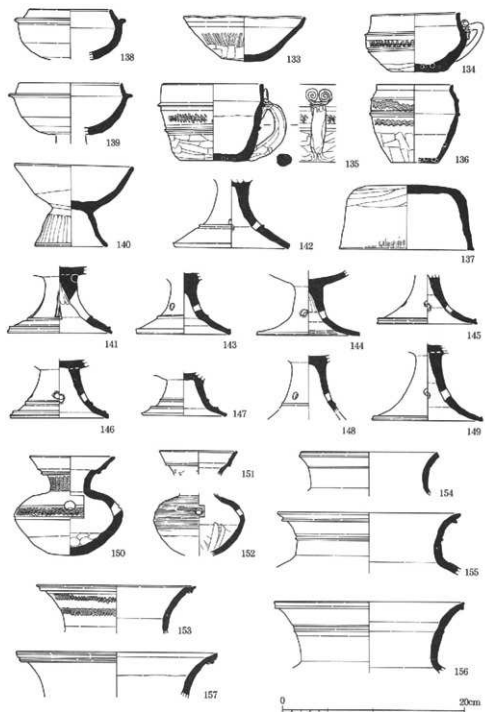
壺 (154~158)

口頸部に凸帯を巡らせるもの(155・156・158)と口縁端部の直下のみに凸帯を巡らすだけのもの(153・157)がある。両者ともTG232号に類例の多い形態で、底体部まで残存する158にはTG232号型式以降急減する縄席タキも認められる。

軟質系土器 (第35図、図版38)

平底鉢 (159~163)

159は完形に復元実測された。口縁端部は面をもっておさめ、体部の最大径は上半部に位置している。高温の酸化焰焼成により大きく焼き歪んでおり、密窯により焼成されたこ



第34図 谷部1 (393-O L) 第V層出土遺物1

とをうかがわせている。その他は口縁部と底部の破片資料である。160・161は体部の膨らみが小さい形態と推定される。

埴 (164~167)

口径36.8cmの大型品(164)と20cm前後の小型品(165・166)がある。164は片口埴で、底底部にはカキ目を施し、把手部付近には1条の沈線を巡らす。166・167も把手部付近に沈線を巡らせ、底底部下半にはタタキ目が部分的に残存する。焼成はいずれも還元焰により須恵質に焼き上がる。165は壺の可能性もあるがここでは埴として扱った。

土師器 (第35図)

高杯(168)と壺(169)を図示した。高杯168は脚柱から裾部が屈曲して大きく開く形態である。脚柱内面にはケズリ、裾内面にはハケを施す。壺169は口頸部が直線的に開くもので、口縁端部をわずかに肥厚させている。

古墳時代後期の須恵器 (第36・37図, 図版38~40)

古墳時代後期の須恵器は、6世紀前半から後半までのものが混在する。

蓋杯 (170~183)

杯蓋174~178、杯身179~183はほぼ同時期と考えられる。蓋は口径10cm前後で、口縁端部には内傾する明瞭な面を有する。杯身も蓋に伴う大きさであり、立ち上がり端部の形態も蓋と同様である。時期は諸特徴からTK47~MT15型式に併行すると考えられる。170は口径14.9cmと大型化傾向があり、天井部と口縁部との境界の稜に鋭さが欠けるなどの特徴も看取される。前者より後出する可能性が高い。171~173はさらに後出する須恵器の特徴を備えたものである。TK43型式を前後する時期のものと考えられる。

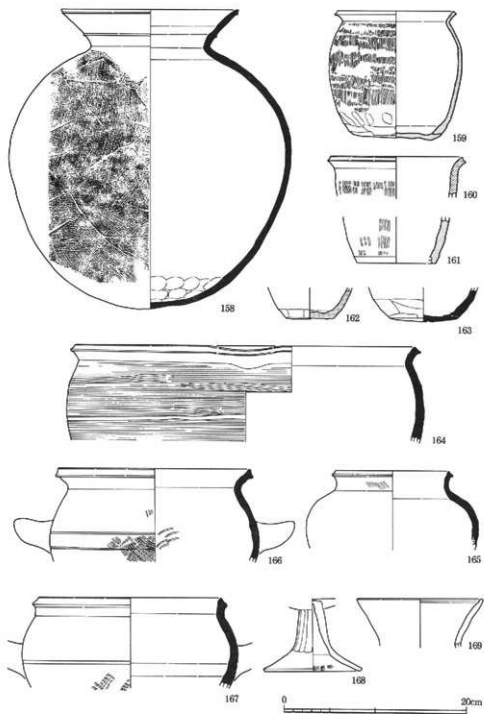
高杯蓋 (184・185)

口径から184は小型の短脚高杯(186)に、185はやや大型の短脚高杯(187)などに伴うと推定される。

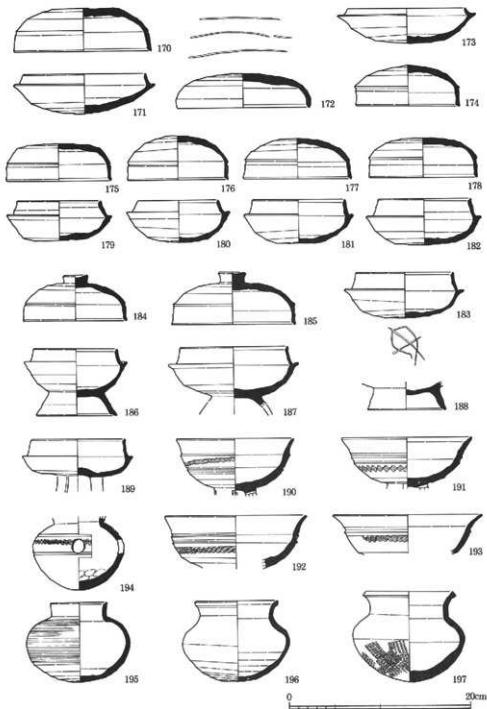
高杯 (186~193)

有蓋高杯(186~189)は、いずれも杯身に脚部をつけた形態であり、その杯部の特徴は179~183とほぼ同一である。脚部は短脚で透かしの無いもの(186~188)と3方に長方形透かしを配するもの(189)がある。

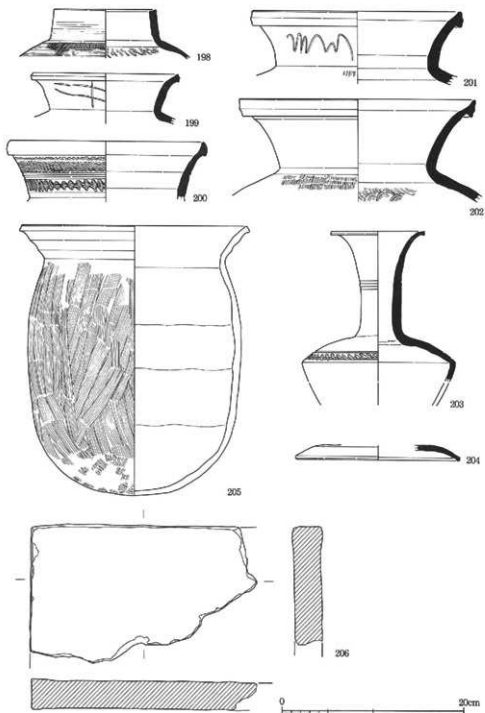
無蓋高杯(190~193)には、口径15cm前後のものと13cm前後のものがある。いずれも口



第35圖 谷部1 (393-O L) 第V層出土遺物2



第36図 谷部1 (393-O.L) 第V層出土遺物3



第37図 谷部1 (393-O L) 第V層出土遺物 4

縁部を外反させる鉢形の杯部形態のもので、体部には波状紋を巡らす。

壺 (194)

体部の形状は球形に近いが、最大径はやや上方に位置している。頸部と体部には波状紋を巡らせ、体部の紋様は浅い沈線によって囲まれる。

小型短頸壺 (195～197)

口縁部が直立するもの (195) と頸部から口縁部を外反させるもの (196・197) がある。

壺 (198～202)

中型壺と呼称されるもの (199～202) 他に、直口壺 (198) がある。中型壺は口縁端部を上下に屈曲させ、ナデにより口縁端中央に稜を巡らせるものが一般的である。

土師器 (第37図205, 図版40)

長胴の甕で、外面は体部をハケ、底部をタタキで仕上げる。内面の底部付近には有機物の付着が認められる。

その他 (第37図)

203は須恵器長頸瓶で体部には刺突紋と沈線を巡らせる。204は奈良時代の須恵器蓋である。206は磚で、色調は褐色を呈する。

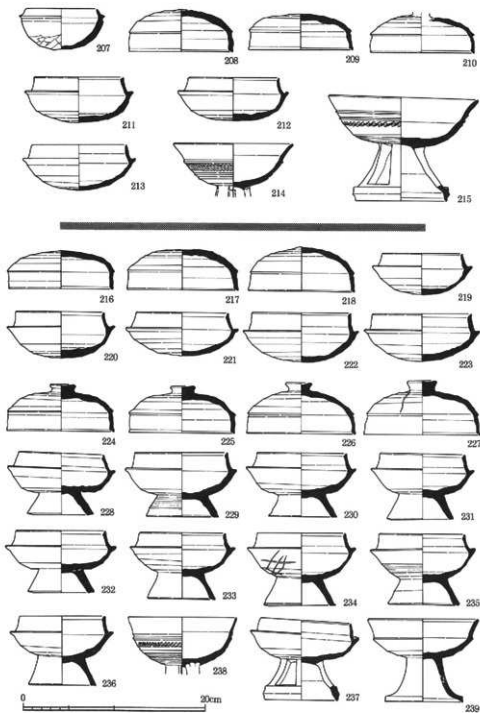
6. 第VI層上面出土遺物 (第38図・図版8・9・41・42)

第VI層の上端面で、古墳時代後期の須恵器が集中して出土する場所が2箇所確認された。いずれも意図的にかためて廃棄したような出土状況を呈し、一括性の高い遺物群として注目される (図版8・9参照)。また、特に土器群2では出土器種のほとんどは蓋杯と有蓋高杯で占められ、祭祀的な様相もうかがえる。谷あるいは丘陵で祭祀を行った後、一括廃棄した可能性も指摘される。

土器群1 (207～215)

蓋 (208～210)

口径はいずれも11cm前後を測る。口縁端部は内傾する明瞭な段を有し、天井部と口縁部をわける稜はやや鋭さに欠ける。天井部は丸みをもつが、口径に対してやや扁平な感を受けるもの (209) もある。210はつまみの付く高杯の蓋である。



第38回 谷部 I (393-O L) 第VI層上面出土土器群 I・2

杯身 (207・211～213)

口径10cm前後を測る。いずれも立ち上がりはやや内傾してのびるが、端部は明瞭な面を有するもの(211・212)と丸みをもって仕上げるもの(213)がある。

なお、207は初期須恵器である。出土位置から土器群1に含めて図示したが、直接伴うものではない。

高杯 (214・215)

いずれも口縁部を大きく外反させる形態で、体部には波状紋を巡らせる。法量は口径16cmの大型品と12.9cmの小型品がある。

土器群2 (216～239)

蓋 (216～218・224～227)

杯蓋(216～218)は、口径11.5～12cmを測り、規格的である。口縁端部は内傾し明瞭な段を有するものが多い(217・218)。天井部は丸みをもち器高の高いもの(218)と器高が低く扁平な感をうけるもの(216)がある。

つまみを有する高杯の蓋(224～227)は、口径11.5～12cmのもの(224～226)ではほとんどが占められるが、13cm前後の大型品(227)も若干みられる。器形の特徴は杯蓋とほぼ同一である。

杯身 (219～223)

口径10cm前後(219～221)のものと11cm前後(222・223)のものがある。立ち上がりは前者は内傾しながらのび、後者はほぼ直立する。口縁端部は内傾し、明瞭な面を有するものが多い。

高杯 (228～239)

有蓋高杯は、口径9.5～10cmの小型杯に、高さ2.2～3.0cmの低い脚部を伴うもの(228～236)が多い。これらは、脚部高に若干の差はあるものの、杯の法量や、端部の形態など諸特徴で共通する部分が多く、比較的規格性の高い一群として認識できる。蓋224～226はこの形態の高杯に伴うものと考えられる。

他の有蓋高杯では、3方に長方形透かしを配する脚部形態のもの(237)がわずかながら出土している。

無蓋高杯の出土は少ない。238は口径12cmの小型品で、口縁部の外反は小さい。239は蓋を逆転させような杯部をもつもので、当谷での出土例は少ない。

7. 第VI層出土遺物（第39～59図，図版43～58）

第VI層からは古墳時代中期から後期の遺物が出土しているが、特に、初期須恵器や軟質系土器を中心とした中期に属する遺物の出土が顕著となる。以下、種類・器種にわけて概説する。

初期須恵器（第39～48図，図版43～51）

蓋（240）

杯身の出土数に比例して、杯蓋の出土数も少ない。240は口径8.2cmを測る小型品である。口縁部は短く、口縁と天井部は低い凸帯状の稜によって分けられる。天井部は低くやや扁平で、広い範囲を静止ヘラケズリで仕上げている。また、この蓋は全体的に器壁が厚く、重厚な感を受ける製品である。

杯身（241・242）

杯身は当谷では出土数の少ない器種である。241は小型の杯で、口径に対して体部が深く、底部はやや平底気味である。立ち上がりは短く直立し、受部は厚みをもって先端部を水平に短く張り出している。器壁が厚いこと、底部から体部下半の広い範囲を静止ヘラケズリによって仕上げるなど、前述の蓋（240）と共通した特徴が看取される。ただ、口径からみて240とは完全なセット関係になるものではない。242は口径9cm、器高4.8cmを測り、口径に対し体部は浅く、立ち上がりが長い感を受ける製品である。受部は体部から肥厚させたように短く、先端の稜は丸くおさめている。全体の器壁は薄く、底部には静止ヘラケズリが施される。241・242いずれも後出形態と考えられる。

碗（245）

把手の付かない異形の碗である。底径より口径が小さく、最大径は体部の下端付近に位置する。口縁部には螺旋状の沈線を巡らせるが、非常に粗いものである。また、器壁は厚く、底部付近のナデも粗いなど、全体的にみても粗雑なつくりの製品といえる。

把手付碗（244・246～254）

底部から内湾して外方向へのびる体部をもつ形態と直線的に外方向へのびる体部をもつ形態に大別される。

前者に含まれるものは246・249～254である。このうち249・250は、内湾の度合、口縁部など細部形態は異にするが、丁寧な底部調整、凸帯の配置などで共通した特徴が看取され、251～254も粗い底部調整、凸帯の配置、渦巻状の装飾を付ける把手の形態で共通した

特徴が写取される。さらに、この2者はそれぞれで似通った焼成の色調を呈している。これまでの大庭寺遺跡の研究成果からは249・250が先行形態、251～254は後出形態とされよう。また、246は口径に対し器高が高いものであるが、この中では先行形態として位置づけられよう。

直線的にのびる体部をもつ形態には244・247・248がある。248は体部全体を静止ヘラケズリで仕上げるなど粗いつくりの製品であるが、口径と器高の関係、直立する口縁形態、板状把手の痕跡など先行形態の特徴を多く備えている。244も口径に対し器高が高い先行形態の特徴を有するが、調整の粗い粗雑品であり通常の製品とは同レベルでは扱えない。なお、244は把手の付かない可能性もある。

異形鉢 (255)

平底の浅鉢で、口縁部を口唇状におさめる特徴などから先行形態に属すると考えられる。口縁部の一方には注ぎ口をつくり、注ぎ口の対面は口縁部を盛り上げ穿孔させている。用途は不明であるが、形態の特徴からは一般の日常土器とは考えにくいものである。色調は茶褐色を呈し、焼成は還元焰まで及んでいない。

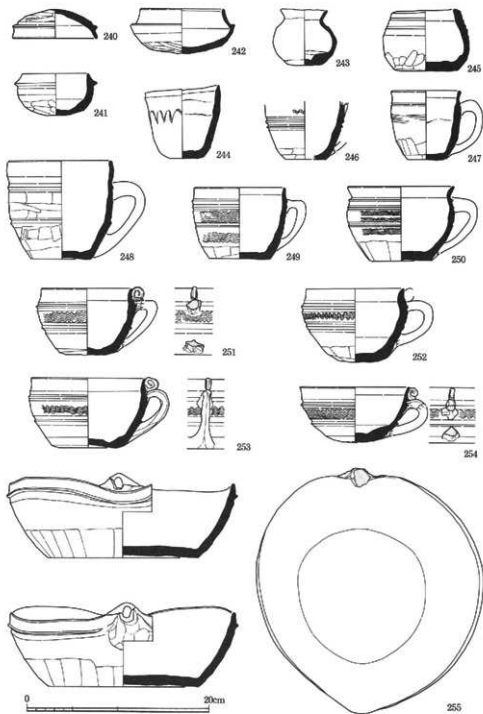
高杯蓋 (256～263)

いずれも天井部は刺突紋や沈線で飾られ、陶質土器の系譜を色濃く反映させた製品である。このうち、完形品に復元されたものは3つに大別できた。

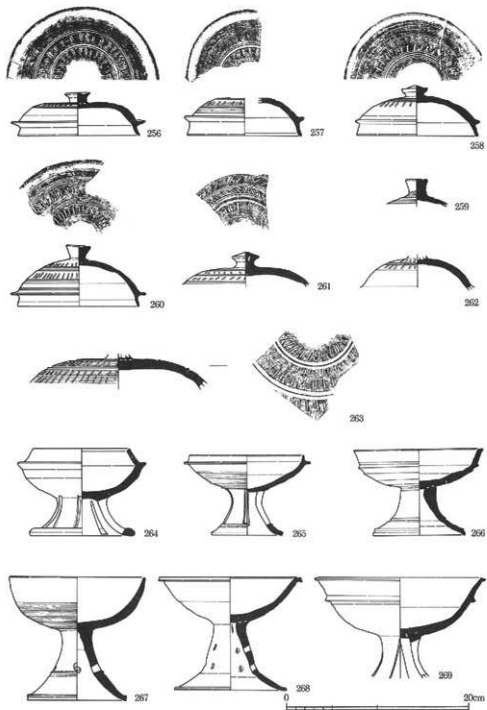
①やや扁平な天井部をもち、天井部と口縁部との境界に巡る凸帯が薄くシャープに張り出すもの (256)、②天井部に丸みがあり、境界の凸帯は断面三角形を呈するもの (258)、③器高が高く②以上に天井部には丸みがあり、境界の凸帯は薄くシャープに張り出すもの (260) である。つまみも、それぞれ個性的であり、①は端部がシャープで中心部をわずかに隆起させる、②は中心を高く隆起させる、③は上端を大きく拡張させないものが伴っている。破片資料の261は②、259は③に含まれる可能性が高い。

以上の3形態をT G 232号と比較すると、②はその断面形からB類に属するものと考えられ、破片資料であるが257はA-2類に属すると推定される。①・③については類似例はないが、その諸特徴からは②に後出するものではなく、図示したいずれも先行形態に位置づけられよう。

その他、高杯の蓋では焼成時の配置の問題や特異な調整方法も注目される。焼成時における配置の問題はT G 232号窯の調査時にも注目され、T G 232号では内面を上にして焼成していたことが確認されている。ここに図示したいずれも同様の焼成方法であり、ここで



第39図 谷部1 (393-O L) 第VI層出土遺物1



第40圖 谷部1 (393-O L) 第VI層出土遺物2

も陶質土器と共通した特徴が看取された。調整では256の内面中心部に残るタキ状の調整が目される。叩き痕跡とは考え難く、アテ具痕跡の可能性が高い。

高杯（264～290）

有蓋と無蓋があるが圧倒的に無蓋高杯の出土数が多い。

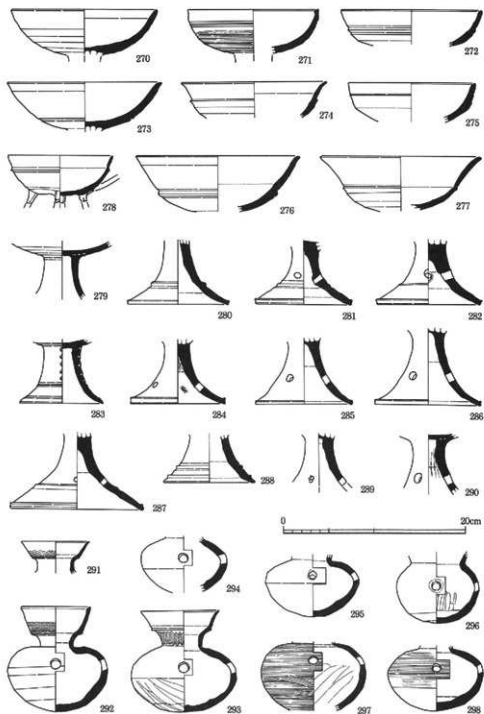
有蓋高杯は2点を図示した。264はいわゆる多窓式の脚部をもつ形態であるが、TG232号と比較すると透かしの数が7方と少ない。265は有蓋高杯としたが、高杯の蓋を逆転させたような杯部をもつもので、蓋が伴うかは疑問が残る。TG232号に類似例はないが、脚と杯部の境界にはわずかながら段をつくりだしており、陶質土器との共通点が看取される。いずれもTG232号とは差異が認められるが、先行形態の範疇で考えられる。

無蓋高杯は多形態に及ぶが、脚部まで残存したものは少ない。266は蓋を逆転させたような杯部をもつもので、土器溜りで同形態のものが多く出土している。267は半球状を呈する杯部をもつものである。脚部の透かし数は異なるが、TG232号の無蓋高杯A類と同形態と考えられる。268は浅い鉢状の体部から口縁部を短く屈曲させた杯部に、裾部が屈曲して大きく開く脚部が伴うものである。口縁端部の形態は異なるが、杯部の類似例はTG232号の無蓋高杯D類に求められる。また、脚部も裾端の形態は異なるが、脚全体の形状、形骸化しているが菱形透かしを採用するなど、D類との共通性は高いといえる。D類から形態変化した可能性も指摘されよう。269は口縁部を外反させた鉢状の杯部を有するもので、土器溜りで同形態のものが多く出土している。

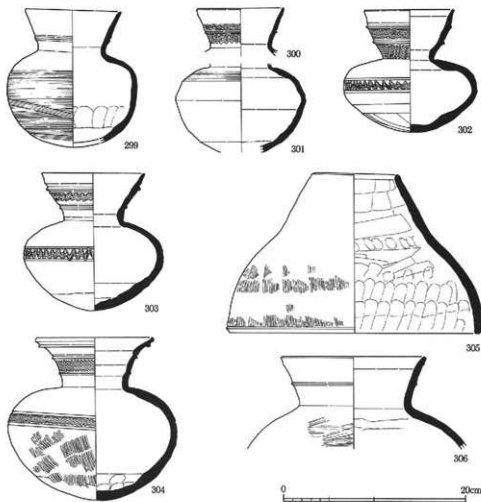
杯部のみが残存例は破片資料のため部分的にしかわからないが、270・271・273・278はTG232号に、276・277は土器溜りに同形態の存在が確認されている。ただ、276・277は土器溜りのものに比べると体部と口縁部の境に巡らす凸帯が下方に位置し、先行形態に含まれる可能性もある。

脚部も多形態に及ぶが、脚裾の上端に凸帯を巡らせる形態（280～282・287・288）の出土数が最も多い。この形態のものは、これまでの研究によって形態変化も捉えられている。280～282・287が先行形態でTG232号でも同形態が数多く出土している。一方、288は脚柱が太く脚高の低い後出形態に属するものである。

凸帯を巡らせない脚（284～286）は、TG232号での出土数は少ないものである。脚高に対して脚柱部が細く、先行形態に属すると考えられる。その他出土数は少ないが、杯部と脚部の境界に凸線が巡るもの（279）や、菱形の透かし状の紋様を施した（283）先行形態の特徴を備えたものがある。



第41圖 谷部1 (393-O L) 第VI層出土遺物 3



第42図 谷部1 (393-O L) 第VI層出土遺物4

甕 (291~298)

多くは口頸部の欠損した底体部の資料であるが、292・293は完形に復元された。いずれも口縁部は頸部から段をもつてのびる形態であるが、292は口縁部が若干内湾しながら長くのびる特徴がありTG232号で類似例が知られている。一方293は外反しながらのびる口縁部形態で、土器溜りに類似例が多くみられる。292が先行する形態である。

底体部についてはこれまでの研究により、土器溜りではTG232号に比べ均整のとれたものが多くみられるようになり、わずかながら円孔の径が大きくなる傾向が確認されている。また、底部の内面調整ではTG232号ではナデで仕上げるが、土器溜りでは押圧痕をそのまま残存させるものが多いことも確認されている。これらの視点から判断して294~

298は先行形態の時期に属すると考えられよう。

小型壺 (243・299~304)

直口壺(299~303)のうち、口頸部の下方に凸帯を巡らし、体部下半の膨らみが大きく球形に近い形状を呈するもの(299・300)はTG232号に同形態(小型壺C類)の存在が認められる。一方、口頸部の紋様を凸帯によって区画し、体部の最大径が上半にある均整のとれた形状のもの(302・303)は土器溜りに同形態が存在する。前者が先行形態である。304は体部最大径18.4cm、器高17.6cmのやや大型のもので、土器溜りで同形態が出土している。243はミニチュア的な小型壺で、調整は粗い。

筒形土器 (305)

漏斗状を呈する筒形土器である。法量は上端口径8.8cm、下端口径29.2cm、器高17.2cmを測る。端部調整はいずれもナデによって行うが、下端部は2回にわけてナデるため凸帯状に膨らんだ段がつく。また、この段の外側は未調整である。体部外面はタタキの後、上半はケズリやナデ調整によって仕上げる。内面は下半にアテ具痕と推定される押圧痕が残存し上半にはナデが観察されるが、上端付近は横方向の粗いヘラケズリで仕上げている。用途は不明である。なお、筒形土器は伏尾遺跡などで土管状の製品は確認されているが、当土器とは大きさ、形状の点で大きく異なっている。

器台 (307~310)

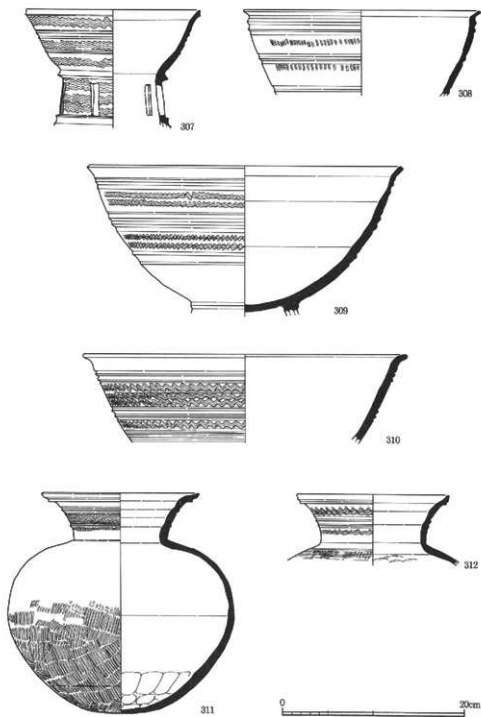
筒形器台(307)と高杯形器台(308~310)がある。

筒形器台は受部から筒部上端付近の部分資料である。受部はやや深めの鉢状を呈し、筒部は下方に向かってやや開き気味にのびる。受部、筒部とも波状紋で飾られ、筒部には7方に短冊形透かしが配される。筒部は上端部以下が残存していないが、おそらく透かしは千鳥状に配されていたものと推定される。TG232号の筒形器台とは受部形態に差異があるが、ほぼ併行する時期と考えられる。

高杯形器台は、いずれも杯部が口径に対し深いものである。口縁部は、稜をもって鋭く屈曲させるもの(308)、緩やかに外反させるもの(310)などがある。脚部については、309の最上段部の透かしが、残存部からの推定で18~20方に配されることが確認されている。多数透かしはTG232号の特徴であり、近い時期に比定されよう。

壺 (306・311~328)

本報告では、壺と甕の区別のつかないものが存在するため、前報告(『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』)に従い、口径30cm以下の製品を便宜上壺として扱った。



第43圖 谷部1 (393-O L) 第VI層出土遺物 5

311・312は口縁部を大きく外反させる広口壺である。311は紋様を凸帯で囲み、312は頸部中央付近に凸帯を巡らせその上下に紋様を施している。

313は直口の短頸壺。314・315はいわゆる二重口縁の壺である。

316は体部から「く」の字状に屈曲させる口頸部の中央付近に凸帯を巡らせるTG232号の壺F類に、317～319は弧状に口頸部を短く外反せる壺K類に属するものである。

321～328はいわゆる中型甕と呼称されているもので、口縁端部の直下に1条の凸帯を巡らすだけのシンプルな口縁形態を特徴とする。頸部は直立気味にのびるもの(321・326・328)、開きながらのびるもの(322・325・327)、ラッパ状に大きく開くもの(323)がある。口縁端部は口唇状におさめるものと面をもっておさめるものがあるが、ほとんどは前者である。

大型甕 (329～332)

329は完形品に復元された。口縁部と焼き台との接地する底部の一部に焼き歪みがあるが、製品として十分に耐えられるものである。口径50.2cm、器高95.2cmを測り、大型甕の中でも法量の大きいものである。口縁端部を丸くおさめその直下に凸帯を巡らす口頸部の特徴はTG232号大型甕のA-1類と共通する。また、体部外面にはハケ調整を施すが、この調整方法もTG232号と共通する特徴である。

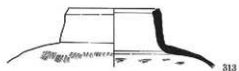
他の2点は口径40cm前後で329より法量は小さい。TG232号口縁部分類によると、330はA-2類、331はB-3類となる。大型甕は形態変化が遅い器種であるが、土器溜り出土のものは口縁端部をわずかながら上下に拡張する傾向のものが多くみられた。前述の3点のうち面をもっておさめる331にはその傾向はみられず、図示したものはいずれも先行形態とされよう。

332は焼き台の付着した底部片である。大型甕の体部を数片を重ねて焼き台とした様子がうかがえる。

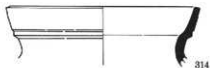
軟質系土器 (第49～51図、図版52・53)

平底鉢 (333～353)

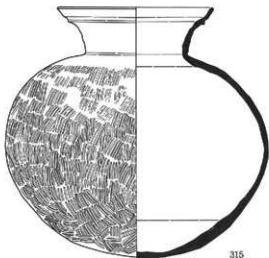
口径からは12～13cm、15cm前後、20cmを越えるものに大別されるが、20cmを越える大型品(342)の出土は極端に少ない。器形では、短く屈曲させた口縁部は端部に面をもち、体部は最大径が上半部に位置し、下半部の張りが小さいものが最も多く出土した。このような特徴を備えたものは、先行形態で顕著にみられるものである。



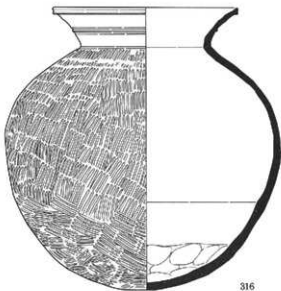
313



314



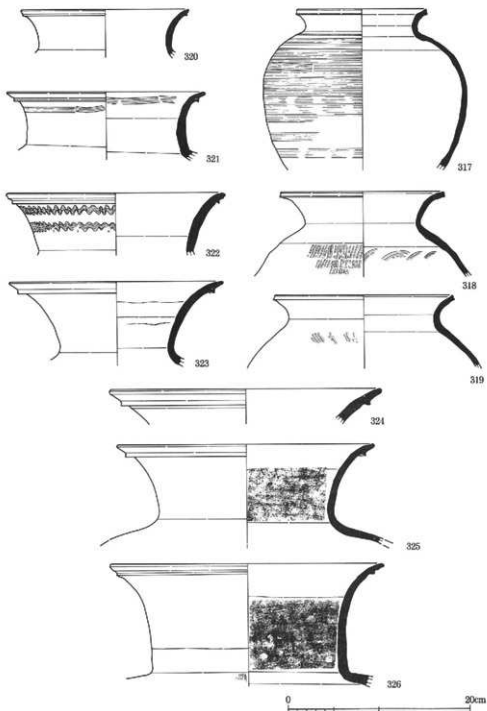
315



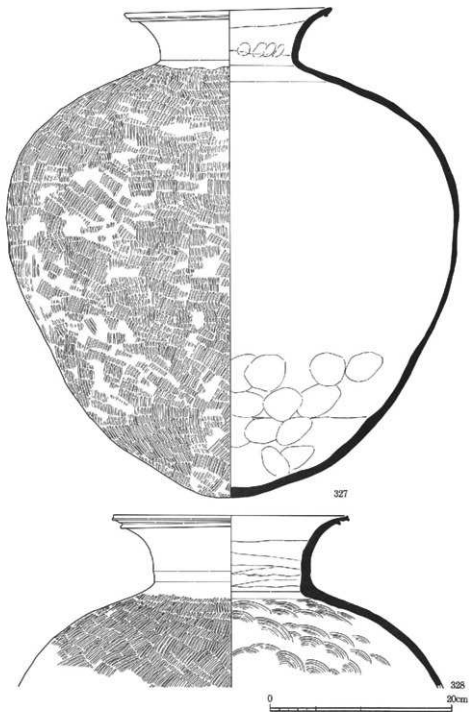
316



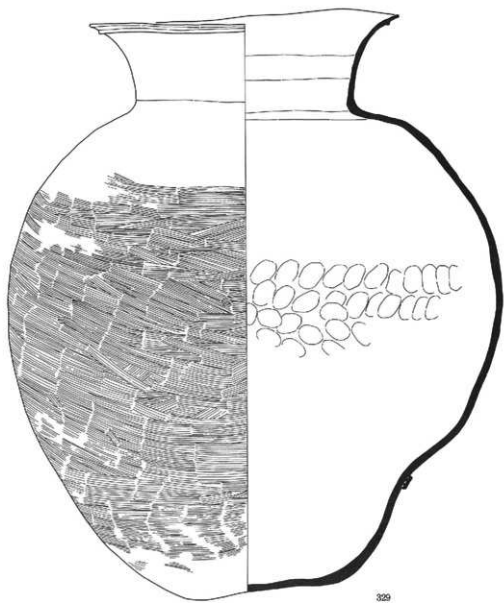
第44圖 谷部1 (393-O L) 第VI層出土遺物6



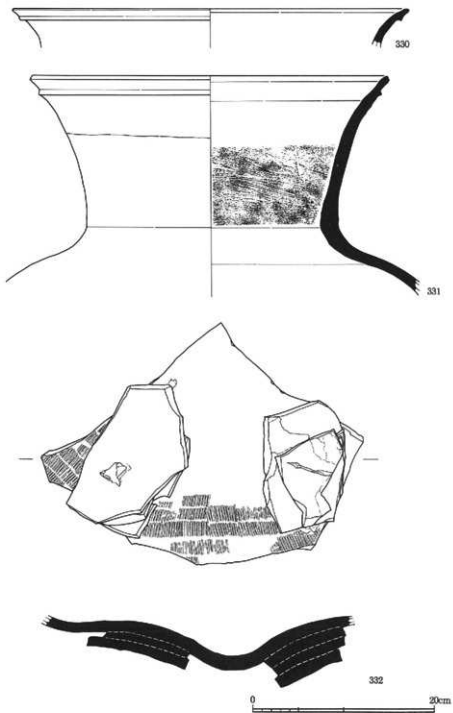
第45圖 谷部1 (393-O L) 第VI層出土遺物 7



第46圖 谷部 1 (393-O L) 第VI層出土遺物 8



第47図 谷部1 (393-O L) 第VI層出土遺物9



第48回 谷部1 (393-O L) 第VI層出土遺物10

その他、数は少ないが、口縁部を緩やかに外反させるもの(334)、端部を丸く仕上げるもの(334・341)、体部からそのまま直立するもの(343)、体部に縄蓆タキを施すもの(343)もみられた。ただ343は平底鉢に含めたが、器壁は厚く、口縁形態も通常の平底鉢とは大きく異なり同一に扱えないものである。

平底鉢では底部から体部下半部の破片も多く出土している。主なものを図示したが総じて体部下半があまり張り出さない特徴がみられる。また、底部付近の調整は最終的に静止ヘラケズリで仕上げるものがほとんどである。

焼成は還元焰まで及んだものは少なく、黄褐色や茶褐色を呈する軟質からやや硬質のもの出土が顕著であった。

長胴壺(354~360)

第Ⅶ層では胴体部まで残存したものが2点ある(360・361)。361は胴体部の張りが小さく細長い感を受けるもので、外面には格子タキ目を残存させる。360は器高約37cmを測る。体部外面には平行タキ目が残存し、内面にはアテ具痕が残存する。タキキ方向は、上部から中央付近は縦方向、下半から底部にかけては斜めや横方向である。

他に口縁部資料(354~359)を示した。多くは口縁部を「く」の字状に短く外反させるが、やや長めの口縁部をもつもの(335・357)もある。端部形態はいずれも面をもっておさめ、凹線状にくぼむ特徴がある。また、体部には外面に縄蓆タキ(355・356)やカキ目を施すもの(358)、沈線を巡らすもの(357)がみられた。

長胴壺にも口縁部や胴体部の形状、調整方法など先行形態の特徴が看取される。

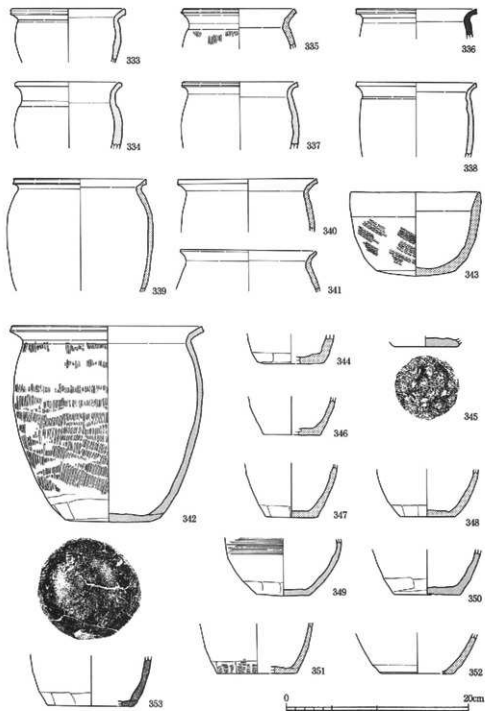
塀(362)

他の軟質系土器に比べ、塀の出土数は少ない。362は口径に対し底体部の深いもので、外面には縄蓆タキが残存する。当谷の前調査で類似例が出土している。

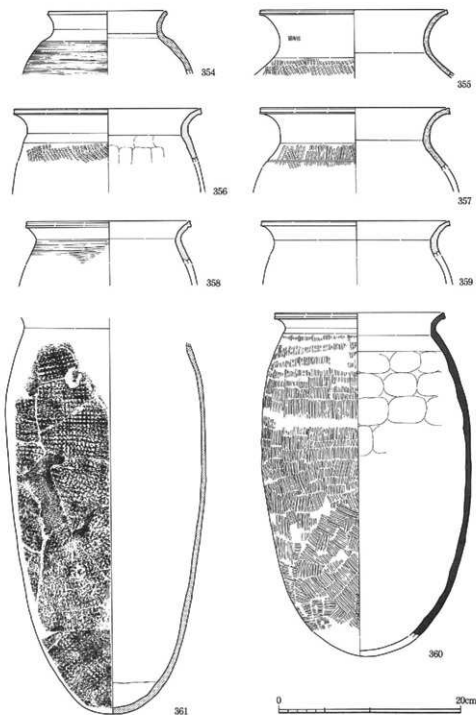
甔(363~367)

甔も他器種と同様、先行形態の特徴が看取される。367は完形に復元された。把手付近から直立する体部をもち、口縁部は短く屈曲する。蒸気孔は中央の円孔から細長い台形の孔が放射状に配される。調整は体部外面にタキ目、底部付近にヘラケズリが観察されるが、最終的には粗くナデで仕上げている。焼成は軟質に仕上がりが、土師器に近い。

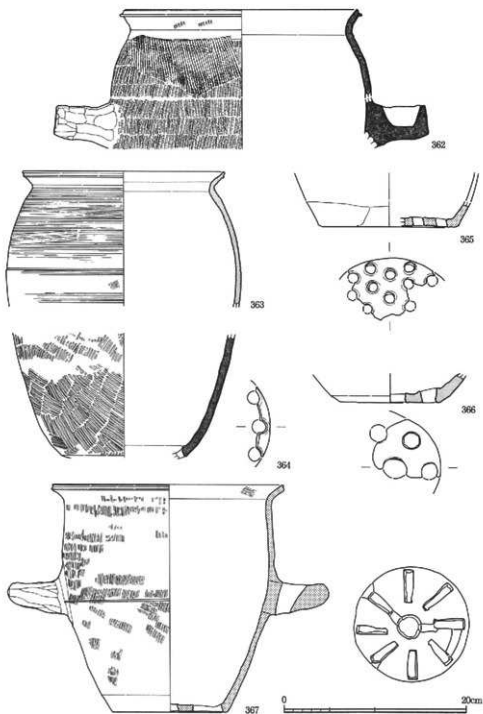
他に図示したものは破片資料である。363は体部に弧状の丸をもち、長胴壺に似た形状を呈するが、中央部付近に沈線が認められここでは甔とした。364~366は底部片である。いずれも蒸気孔には小円孔を十数個巡らすものと推定される。



第49回 谷部1 (393-O L) 第VI層出土遺物11



第50図 谷部 1 (393-O L) 第VI層出土遺物12



第51図 谷部1 (393-O L) 第VI層出土遺物13

古墳時代後期の須恵器（第52～57図，図版53～57）

第Ⅴ層では時期幅をもった須恵器が混在していたが，第Ⅵ層の出土品は後期でも前半代に比定されるものに限られている。また，この様相は，第Ⅶ層上面で検出された土器群1・2との層位関係とも矛盾しない。

蓋（368～370・377～379）

杯に伴う蓋は，口径10cm前後で，第Ⅵ層上面で検出された土器群1・2と同形態である。

高杯の蓋はつまみに若干の差が認められる。379は中央部が端部より上の位置まで隆起するが，この形態は土器群2ではみられない。

杯（371～376）

杯も蓋と同様，土器群1・2と同一形態と考えられる。

高杯（377～390）

有蓋高杯には，低い脚部を伴うもの（377～381）と透かしが穿たれた短い脚部を伴うもの（382・383）がある。このうち，前者は土器群2で数多く出土しているが，当層では，口径，脚端部など部分的に異なった特徴を有するもの（377・381）もみられた。また377は蓋と軸着しており，セット関係を知る上で良好な資料である。

無蓋高杯は，大きく外反する口縁をもつ形態の出土が顕著である。脚部は有蓋高杯に比べ長く，透かしは3方または4方に配するものが混在する。

甕（391）

口頸部が高く拡張される以前の形態である。口縁部は短く外方にのび，頸部には波状紋を巡らせる。

提瓶（392・393）

392は体部の前面が丸く膨れ，背面はほぼ平らである。両面ともカキ目が丁寧に施され，両肩と前面上部の計3箇所には環状の把手がつく。また，前面には魚と推定される絵画が2箇所に線刻される（鳥とする説もある）。体部成形は，平らな背面から粘土を巻き上げ，前面の中心部で絞り込んで塞ぐ方法で完成させている。393は392に比べるとやや小振りの製品である。肩の把手は欠損するが，環状であったことが確認される。丸く膨らむ前面に施されたカキ目は繊細で，上部にはへら記号が線刻される。

壺（394～398）

394は頸部の長い小型品である。395～398は口径に対し頸部の短いものである。口縁端部は，395・396が端部の下方を三角状に，394・398は台形状に肥厚させる。